
血濡れ夜叉の泣く頃に

咲亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血濡れ夜叉の泣く頃に

【Nコード】

N8102N

【作者名】

咲亜

【あらすじ】

ひぐらしと銀魂のコラボ小説！

百年の輪廻を終えた梨花達の新たな惨劇とは？

ある日、羽入のオヤシロセンサー（しかもバラレル 雛見沢症候郡に反応するらしい）に連れられ、梨花は江戸にタイムスリップしてしまった！

しかも雛見沢症候郡に感染していたのは、銀髪に緋色の瞳、坂田銀時だった！

羽入の繋ぐカケラから部活メンバーと共に、この大江戸の惨劇を回避できるのか？

さらに梨花は皆のいる離見沢に帰れるのか!?

ギャグほのぼの シリアスターク

プロローグ 全てのハジマリ(前書き)

実はひぐらしも好きな私の初コラボ小説です！
逃げないでえ、ぜひ読んでください！

プロローグ 全てのハジマリ

その雫は何？

貴方の流した涙？

その赤は何？

貴方の心の血？

その傷は何？

貴方が何かを求めた証？

じゃあその痛みは何？

それは私にも、貴方にも分からない事。

でも、

血濡れの傷心物語のページを開けば、きっと……。

誰にも理解してもらえない、

涙を、

血を、

傷を、

そして痛みを、

それを読み進めるあなたが、分かってあげなくちゃね。

鬼殺し編。

出会いは時代の波の中。

私を助けた銀色の鬼。

日常は時代の浜の上。

私を受け入れた二人の温もり。

始まりは時代の遙か果て。

私の輪廻は再び廻りだす。

プロローグ 全てのハジマリ（後書き）

はい。始めのまとまりは『鬼殺し編』です。
基本ほのぼの、たまにシリアス、後シリアスダークです。

次回予告。

梨花と羽入がチンピラにからまれた所を助けてくれた銀髪の侍。
それが、梨花と彼との出会いだった……。

意味不。何じゃこりゃ。

感想、評価よろしくおねがいします！

鬼殺し編 其の1 くら運命的な出会いでもタイムスリップはやめてほしい

梨花&羽入と銀時の出会いです。

では、さようなら。

鬼殺し編 其の1 くいくら運命的な出会いでもタイムスリップはやめてほしい

「さあて羽入。私達が今、どういう状況にあるか説明してもらいましょうか？」

そう。彼女、古手梨花は、今何とも言えない状況に出くわしていた。空には飛行機にも似つかない、何か宇宙船みたいなのが飛んでいる。一つ目。

周りには変な宇宙人みたいな奴らが歩いている。二つ目。

家とか古風で着物とか鬘とかあるのに、何故かケータイ使用。三つ目！！！！

「どーゆー事!？」

『あうあうあう・・・じ、実はなのです、昨日、ボクのオヤシロセンサーがびーんと来たわけです』

「うん。アンタにそんなセンサーあった事自体驚きよ。続けて」

『センサーは雛見沢症候群に反応するのです。で、辿ってみたら此処で・・・』

呆れて声も出ない。という様子の梨花を見て、羽入があたふたする。

「・・・分かった。雛見沢症候群に反応したのは認めるわ。ただね、一つ聞きたい事があるのよ。それはね・・・。どーして私まで巻き込んで、現実なんかじゃない所までタイムスリップなんかするわけ!!!??？」

『だ、だってボク、実体化が・・・』

「てめー昭和五十八年七月まで実体化してたじゃない。あの気力出ないの？え？」

「気力なんてないのです！欲しいのならボクにシュークリームを！
！！！」

うるせえ、と口の中に唐辛子を放り込む。

無論、梨花はこのぴりぴり痺れるような辛さが大好物だ。

が、

『にゅあああああああ！！！！辛いのですうううう！！！！！！』

無論、この阿保巫女、羽入は、（本人曰く）この地獄のような辛さが大嫌いだ。大っ嫌いだ。大事な事なので一応二回言いました。（羽入談）

さて、何時までもこのグダグダというか、マンネリというか、とうよりギャグちっくな空気を漂わせておく訳にもいかないのと、とりあえずぶらぶらと歩いてみる事にした。

着物といっても、何故か近代化しているこの世界。

昭和五十八年の私服で歩いても、何ら問題はない。

ただ一つ、問題なのは……。

どんっ。

「みつ、ったーなのです！いいのですか、ボクは今、虫の居所が……

「あん？何調子こいてんだガキ！？」

ヤのつく自由業らしき人が大量におり、梨花はいきなりからまれる。それを巧みな話術、つまり、

「悪いのですが、貴方には関係ない事なのです。お手数すみませんです。では、ボクはこれで。さよならなのです。にぱー」

天使スマイルでそそくさと逃げようとするが……。

「待ちやがれっ」

後ろ襟をむんずと掴まれ、思わずのけ反る梨花。

どうやら、この自由業さんに、天使スマイルがきかなかったよう。

「何へらへら笑つとんじゃ。こちとら腕へし折れて痛てーんだよ！」

「歳もいかない女の子にぶつかって腕がへし折れるなんて、カルシウム足りないですよ。羽入、スタンガン」

羽入に小声で合図し、何処からともなくスタンガンを受け取る。

バチバチと音を鳴らせるが、相手はナイフを持ち、ニヤリと笑っている。

梨花の頬を冷や汗が流れたが、こちらも、鉈にモップで応戦した身。それなりの余裕はあった。

しかし……、

「おいおい何やってんだ兄ちゃん。ガキ相手にナイフなんか持つちやつてさ」

「新手か！？とスタンガンを構え直すが、

そこにいたのは白髪、いや銀髪で、緋色の目をした男。

腰には木刀をさしているが、なんというか、侍とか武士道の欠片もなさそう（梨花曰く）な奴だ。

「ああ？何だテメー」

「何だ、ただのチンピラかよ。おい、大丈夫かお前」

「みー、大丈夫なのですよ。にぱー」

「よしよし。そんなスマイルできる程余裕なら大丈夫だ。っーか何これ？バチバチいつてるけど」

「スタンガンなのですよ。ばちっ、てやれば皆ねんねんころりて、運が悪いと永久の眠りにつける代物なのですよ」

「じゃあのチンピラにばちっ、てやってこい。何か面白そう」

「何勝手な事言っとなんじゃコラアアア！！」

突進してくるチンピラに、男は素早く梨花の手からスタンガンを取り、思いっきり投げ付けた。

スタンガンはチンピラの額にクリティカルヒットし、バチッ、という放電音の後、仰向けに倒れた。

「黄泉の国までデッドオアライブしやがれ」

「みー……、い、いつの間に……」

人の気配に気付かぬなど、この古手梨花一生の不覚!!と拳を握る百年の魔女。

だがその姿勢も、羽入の一言でももの見事に崩れ去る。

『り、梨花っ。この人なのです! 雛見沢症候郡発症者!!!』
「えっ」

なんと、百年の魔女と雛見沢症候郡は巡り会う運命なのか、この男が、羽入の言う、雛見沢症候郡発症者である。

……というか、と梨花は目を細める。

「何この人。罪の『っ』どころか、『t』さえなさそうんだけど」
『でもホントにそうなのです! ボクがそう言うんですよ。オヤシロ様が!』

また口に唐辛子を放り込んだ梨花だが、確かに羽入の言う事も一理ある。

「あの……」

「あ?」

緋色がこちらを向く。

「ボク、此処に一人で来て……、泊まる場所が無いのです。あの、貴方の家にしばらく泊めてくれませんか?」

「……ま、いいんじゃないね?」か一人? 後ろの巫女娘は何よ?」

何って……、巫女娘なんてそんなの……、

「あ」

『あうあう、あ……ボクなのですか？』

「そーよアンタ以外に誰がいるのよ」

こんなに早く見られるとは……。

すでにレベル5発症か？と頭を抱える梨花。

「えっ……と、この阿……巫女は羽入なのです。しいて言えば幽霊なのですよ。にばーっ」

その時、元々青白い顔色の男は、もう青いんじゃないかというくらい顔色を悪くする。

あれ？と言つうちに、男はわざとらしい声でいう。

「そそそそーか！！やっぱ俺の見間違いか！！違うもんな！幽霊なんて信じてねーし！！」

ははあ、と梨花は黒い笑みをうかべる。

コイツ、靈感が強いけど幽霊が嫌いなタイプか……。

「まあいいのです。ボクは古手梨花。貴方は？」

「俺か。坂田銀時。この町で万事屋やってんだ」

「こつちも自由業か」

「何か言ったか？」

「何にも」

古手梨花と坂田銀時の出会いは、此処から始まった。

ところで、

『ボクは羽入なのです！銀時、ボクにシュークリームよこせなのです！』

「なあ、この巫女五月蠅いんだけど」「知るか」

と言って、口に一握りの唐辛子を放り込む梨花だった。

鬼殺し編 其の1 いくら運命的な出会いでもタイムスリップはやめてほしい

あれですね・・・羽入がハイテンションだ！

後口調がよく分かりません先生！！（先生誰だ）

次回予告。

梨花&羽入、そして万事屋三人と共に大江戸巡り！

真選組とかヅラとか・・・。

感想、評価よろしくおねがいます！

鬼殺し編 其の2 自己紹介とかベタだけどそれが運命の成り行きだから仕方

ひぐ銀そのに!!

ケータイ取られたんで、PC投稿です。

実はテストの影響……。もうテストなんか大っ嫌いだあこんちくしょー!!

社会大大大嫌いだよもう!!

荒れる前に、本文をどうぞ。

鬼殺し編 其の2 自己紹介とかベタだけどそれが運命の成り行きだから仕方

梨花は、先程銀時が言っていた万事屋に、銀時と共に向かっていた。

「銀時」

「あ？」

「万事屋には、他にも住人がいるのですか？」

「ああ。眼鏡とチャイナが」

何だそれ?!と目を剥く梨花をよそに、ついと銀時が指をさす。

「あれが、万事屋」

万事屋銀ちゃんという看板が高々と掲げられた店。

ただ、人気が無いというか、客無し？

階段を上り、ドアを開ける。

「新八一、神楽ー、帰ったぞー」

「会社員のお父さんですか、銀時」

という梨花のツッコミの後、バタバタとこちらに向かってくる足音。

何かと認識する前に、びよーんと飛び付く赤い影。

「銀ちゃんー!!おかえリアル!!」

「おーおーただいま」

「銀さん、ジャンプ買えました?」

「売切れてたよ。ったく、ジャンプの一つくれー置いとけってんだ」

銀時の言葉に顔を綻ばせる二人だが、梨花に目が止まり、きよとんとする。

「銀ちゃん、この子誰？」

「えっと確か、古狸？」

「古手！古手梨花なのです！チンピラにからまれた所、助けて頂いたのです。一人で此処まで来てしまって、泊まる場所がないのです。しばらく泊めてはくれませんか？にばー」

魔女の天使スマイルに魅了され、新八も神楽も頷くしかない。

「私、神楽ネ！梨花だヨな？よろしく！」

「僕は、志村新八。よろしく、梨花ちゃん」

「はい。よろしくなのです」

そして例により、この人物も..アンデット..

『ボクは羽入なのです！シュークリームが大大好きなのです！！』

『！』

銀時が梨花に目で合図する。

すかさず、一握りの唐辛子で、羽入を黙らせる。

『あうあうあうあう・・・』

涙目で辛さとの対決を繰り広げる羽入。

『あう・・・梨花は酷いのです。ボクを何時も辛さで虐めて・・・ボクは実体化さえ満足に出来ないのです、あうあうあう』

ここまで言われると、罪悪感が出てくる。

仕方ないから、後でシュークリームを食べてあげよう。

『やった やったなのです』

「その代わり、実体化しなさいよ」

『はい なのです』

「梨花あ、何ぶつぶつ言ってるアルカ？」

あ、いけない。と梨花は口を接ぐんだ。

今この状況の中、羽入が見えるのは銀時だけ。

迂闊に羽入と会話が出来ない・・・が、

それは未来の部活メンバーも同じなので、対処方はある。

「何でもないのでしょ？悪い幽霊さんがいたかもしれないので、出てもらおうように頼んでたのです。にばー」

「梨花ちゃんは冗談がうまいね。僕も見習うか」

・・・というか、冗談で冗談じゃないんだけどね・・・。

ちらりと羽入を見すえると、本人はしゅうと縮んだ。

「おし、んじゃ買い物ついでに大江戸かぶき町の案内してやんよ」

「あっ、じゃあ財布とってきますす！」

「ついでに私の傘も」
「はいはい」

神楽は、傘が無いと駄目なのか？

銀時に耳打ちすると、「日に弱い、夜兎っていう戦闘種族なんだよ」と言われた。明日の予定は図書館直行だ。

「はい、神楽ちゃん。梨花ちゃんは、かぶき町、初めてだったよね？」

「はいなのです」

「じゃあ帰りに、桂さん所と真選組に行きますか。暇つぶし程度ですが」

かぶき町初めて、ってか、江戸が初めてなんだけどね……。

ため息をつく梨花に、羽入がこっそり言う。

『なんとなくボクも、銀時に罪なんて無いような気がしてきましたです』

「まあ、常人ならそう思うわよ」

『でも……』

「でも？」

そこで羽入は急に真面目な顔になる。

その視線は、銀時の横顔に向けられていた。

『銀時は時々、とても寂しそうな顔をするのです。ボク達が会ってから、何度も。こんなに温かい家族がいるのに、あの横顔は、かつ

て罪に気付いた圭一やレナに、そっくりなのです。あの腑抜けたような態度も、恐らく偽りの仮面なのですよ」

「・・・たしかに。羽入、アンタ今度でいいから、銀時の過去までレッツゴーしてらっしゃい」

『L5が出たら大変なのですよ？銀時は今、ギリギリL2ですが、そもそも難見沢に寄った事の無い人間が、何故かかっているのか、謎なのです・・・』

「第一、最初の感染者はこんな時代じゃないわよね？たしか」

『梨花、此処はパラレルワールドなのです。つまり、何でもあり、だから、この世界をほっぽり捨てる事なんて、訳無いのです』

「後に下がる古手梨花様とでも？」

『それが梨花なのですよ』

たまに見せる、オヤシロ様特有の不敵な笑みを浮かべる羽入。

しかし、すっかり会話に夢中になって、置いて行かれたようだ。

それを見て、慌てて後を追いかけた。

しかし、此処は宇宙人らしき人物が大量にいる。

「新八、あの宇宙人みたいなのは何なのですか？」

「ああ、天人っていう、宇宙から来た人達だよ」

「天人？」

「私ら夜兔族も天人アル。まあ、基本的にばれないヨ、コレ」

確かに、神楽が天人でも、そう気にする人はいないだろう。

というか、こんなチャイナ服だと、レナにお持ち帰りされる・・・

。 酔昆布をくわえながら意気揚々と歩くその姿は、ほほえましいとい
うか、何というか。

「よし、買い物ついでだ。パフェ食いに行こーぜー、なー新八」
「なー新八じゃねーよ！つーかパフェって、己の娯楽だろーが！！
オメーのパフェ代に毎月いくらの金が出るか知ってるか!？」

新八の激しいツツコミに引きつつ、梨花が口を挟む。

「みー、銀時は甘味狂いの糖分王なのです。みぱー」

ブラックスマイル。それはまさに百年の魔女の微笑み……。

梨花の底力は計り知れない。

「……梨花ちゃん、恐い……」

「すみません、いやホントすみません。土下座いたしましょうか？」

「み、みっ!？そんな事しちゃダメなのです!!」

公衆の面前でそんな事をされたら、こっちが恥ずかしいのよ!!と
両手を振る。

「あれ、旦那ですか？」

声の主はジミーこと山崎退。

その横には、土方と沖田の姿。

「よオ旦那、そろつて買い物ですかイ？」

「おーそうよ。おたくらは何？見回り？」

「病院行きをかねた見回り、と言っておくか」

「大変だねえ、怪我でもしたか」

しばらく、他愛の無い談笑を始める万事屋。

いつ終わるのかと待つが、いつこうに終わらない。

あるう事が、喧嘩まで始まる。

「・・・あの」

しかし梨花の声は、騒ぎによって届かない。

「あの、ねえったら」

栗色の髪をした少年と神楽が、何か知らんが喧嘩してる。

というか、人間業じゃない動きがいくつか・・・。

「・・・羽入、スタンガン」

『え？何する気ですか？』

「いいから」

羽入からスタンガンを受け取り、電圧を最小限まで下げる。

そして、一時間前に銀時がやったのと同じよう、喧嘩の間に投げた。

パチッ、という音の後、少年と神楽が咄嗟に離れる。

そこでやっと、梨花がいる事に気付いた黒集団。

つつかたとスタンガンに歩み寄り、拾いながら言った。

「・・・アンタら、猿じゃないんだから公衆の面前で喧嘩なんて、幼稚な真似は止してくれないかしら？私もね、無視されたりぎゃーぎゃー騒がれたりで苛々してるのよ。それでもまだやるってんなら、私が相手になるわよ」

電圧を最高にし、黒梨花スマイル。

この言葉&笑顔には、皆さん揃って、

「「「「「すみませんでした」「」「」「」

と言うしかなかった。

「分かってくれてよかったのです みー、にぱー」

・・・つーかこの笑顔との違いは何ッツ!!???

嬉々と笑う梨花を見て、此処にいる全員が共通して思った事、其の一だ。

して、其の一。

「・・・お前誰？」

最大の謎、この少女はいったい誰か!

「古手梨花なのです。好物は辛い物、陰険な笑顔を浮かべる奴が大嫌いなのです」

「ほう、古手梨花か。おもしれーじゃねーか。俺のドSの罠にかか
るか？」

「耳が腐りそうな台詞ですね。罠って何なのですか、気持ち悪いの
です」

いや何故星!!???

もはや恐怖の対象でしかない。恐るべし、古手梨花。

「あ、俺は土方十四郎だ。好物はマヨネ丼だ」

「・・・マヨラーなのですか、お前は。考えただけで吐き気がする
のです」

「・・・同感」「・・・」

「テメーら斬つたるかアアアア!!」

「あ、えつと！俺は山崎退。監察やってます・・・」

「みい、今までで一番普通なのです」

にい、と笑う。天使の笑顔だ。

ほつと息を和ませたのもつかの間、

「うるさいわよ、近所迷惑」

冷たく土方に言い放った。

「んだとガキ!？」

「大体刀所持って何？アンタら、この世界には廃刀令とかないわけ

「？」

「梨花ちゃん、土方さん達は幕府の役人だから、帯刀が許可されるんだよ」

「……え！？ボクはてつきり、刀所持のチンピラもどきかと……」

チンピラ呼ばわりされた三人は、ずーんと沈む。

銀時が声をかけても動かない。ただの屍のようだ。

「武装警察、真選組。副長の土方に、一番隊隊長の沖田、監察の山崎だよ。……おい梨花、平気か？」

「警察……このエセスとマヨラーが、警察……？」「そんなにありえないか？」

「……いや、大石もいるし……。ごめんなさいなのです。失礼な言葉、許してほしいのです」

「……あ、いえ……」

さっきの黒梨花が、目に焼き付いて、やばい程恐怖が取れない真選組三人でした。

さて、真選組と別れ、向かったのはとある屋敷。

……うっわー、でかつ。

見上げて小さく呟く梨花。

インターホンを連打しながら銀時が中に向けて言う。

「ツラー、ツラー、いんのかコノヤロー」

「銀時、ちよつ、友人にツラはちよつとどうかと思うのですが・・・」

「何だよ、オメーにだっていたじゃねーかツラの友達」

「いないわよ！そんな友達！！つーかアンタ私の何を知ってんのよ！！！！」

「おい新八、梨花にツッコミ役取られんぞ」

「負けませんからね、梨花ちゃん」

何がだよ。と思い浮かべる梨花。

相変わらずツラを連呼する銀時に、冷たい視線を投げかけ、梨花も声を張り上げる。

「すみませんですー、いますのですかー？・・・えっと、誰でしたっけ？」

「桂アル。でも、ツラの方が楽アルヨ」

「いやいやいやいやいや・・・そんな不謹慎な呼びかたされる友人が可哀想になつてくるわよそれ」

「気にしないヨそーゆーの」

行き先不安な少女だ・・・。

もういつその事勝手に開けて入ろうとする無礼極まりない行動を起こそうとしている銀時達を押しとどめ、羽入に声をかける。

「羽入、中見てください」

『命令形なのですか！？』

「いいから行ってきなさい。アンタ此処まで何にもしてないじゃないかい」

『あ、あうあうあう。分かりましたのです・・・』

ふよふよ飛んで行って、柵を越えて中の様子を探る。

直後、

がらららっ、と扉が開き、中から長髪の男性。羽入、余計な仕事をせてすまん。

「何だ、外でヅラと連呼しおって、俺の名前は桂だ!！」

・・・あ、納得。

さっきまで不謹慎だの可哀想だの言っていた梨花は、その男性の容姿を見てあっさり納得した。

長髪だからヅラに見える。うん納得。

桂だからヅラ。やっぱり納得。

「桂、イコールヅラ。納得なのです」

「だろ?」

「だろじゃないだろうが銀時!・・・そういえば、この少女は?」

「古手梨花と申しますのです。貴方はどちら様なのですか?」

「うむ。桂小太郎と申す。先駆け行くは攘夷だ」

「は、はあ・・・」

もう意味の分からない電波キャラに、ただただ口をあんどくりと開ける事しかできない梨花。

そして無駄な仕事をさせられ、しゅんと落ち込んでいる羽入。

・・・つーか、コイツ本当に銀時の友人？
何かかけ離れていて合わない・・・。

「銀時の友人と聞きましたが、どれくらいの付き合いなのですか？」

「幼少の頃からだ。というか、そんな事話したのか、銀時」

「おお、悪いか」

・・・確かに、やりとりは自然。

。 嗚呼、でも分からない・・・。明日は図書館直行しましょう・・・。

『梨花、シユークリームは？』

「・・・また今度」

鬼殺し編 其の2 ～自己紹介とかベタだけどそれが運命の成り行きだから仕方

真選組と桂を出しました。

・・・え？局長？

・・・さあ？多分妙ちゃんのスーカーしてます

次回予告。

梨花がとある図書館で見つけた小さな運命の手がかり。

その手がかりは、いったい何処に繋がるのだろうか・・・？

感想、評価よろしくおねがいします!!

鬼殺し編 其の3 く女と女の戦いはいつ見ても恐ろしいく (前書き)

結局夜中ですね・・・。

眠いし7時間の筋肉痛が・・・。

では、本文をどうぞ！

鬼殺し編 其の3 く女と女の戦いはいつ見ても恐ろしいく

さて翌日、様々な疑問が浮かび行くこの大江戸かぶき町の事を調べる為、梨花と羽入は図書館へ向かった。

しかし、

「・・・図書館、何処!？」

そう、江戸なんて今の今まで来た事なんか無い梨花。

図書館なんて何処にあるかなど知ったこっちゃない。

幸い、地図を見つけて、無事、図書館に着いた。

「えっ・・・と、まずは・・・」

とりあえず歴史のコーナーに行く。

あの天人達が、何故江戸に来たかが知りたいからだ。

「んー・・・、これじゃない。あれも違う。あっ、これだ」

今から二十数年前の本を、片っ端から机に運んで読む。

始めは隅々まで読んでいたが、段々めんどくさくなり、ざっと通してページをめくる。

「天人が来た理由、地球の豊富な資源、そして地球人が弱い事をい

い事に、幕府に言い寄り、開国させた。と、まあこんなものよね」
『それに反対した人達も少なくないのです。あっ、梨花、これは何
ですか？』

羽入が指差したのは、『攘夷戦争』という文字。

・・・攘夷？

『先駆け行くは、攘夷だ』

「桂も言っていた攘夷……。私達の世界では、アメリカなどの外
人を排除する運動……。此処では黒船の代わりに天人だから……。
天人を排除する戦争？」

横にうずたかく積まれている本に、攘夷戦争の本があったので開い
てみる。

「・・・差し当たり変わった所はないわね」

『でも、桂が攘夷と言っていたという事は、攘夷活動、それも最近
なんてものではない前からやっていると思いますのです』

「言い切ったわね。根拠は？」

『梨花は、あの目を見ましたか？千年の間、あんな真っ直ぐな目は
見た事なかったのです』

ほう、つまり『侍』の目と？

ただの電波にしか見えなかったけど……。と首を捻る梨花。

「あの若さだと、こんな前半の戦争には出てないわね。後ろから見
た方が楽よ」

『何で始めから気付かないんでしょうね』

「余計なお世話よ」

ぺらぺらページをめくる。

『あつ、あつ！梨花！！ストップ！！』

いきなり羽入が叫ぶので、本を破きそうになった。くわばらくわばら。

「何よ羽入。私を心臓麻痺させたい気？」

『違いますのです！ここ！桂の名前が乗ってるのです』

「えっ？」

羽入が指差した所を見ると、確かに桂小太郎の文字。

『桂小太郎 狂乱の貴公子。』

高杉晋助 猩々の剣

坂本辰馬 土佐の黒龍

中でも戦場を血で染め上げ、敵味方双方から恐れられたのが（不明）

白夜叉』

「笑っちゃう程ピンポイントで載ってるのね」

『梨花、続きを』

「はいはい」

『幾多の敵を、鬼のような冷徹さで斬り捨てる』

「おっかない人ね」

『だから二つ名が夜叉なんですよ』

軽口を叩いていた梨花達も、次の文を読み、言葉が出なかった。

『銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿は、まさしく夜叉』

「……まさか」

『……まさか、なのですよ。梨花！』

「……そうね、でも、根拠が……」

『根拠根拠まだ言うのですかバーカ』

無駄口叩くなアホ巫女が。

ハバネロにしてみた
唐辛子を口に放り込んで、本に目を戻す。

「確かに、銀髪なんて銀時しかいないけど、でもさ、私さ、あの人がその白……夜叉だっけ？には見えないんだけど」

『梨花、この世界は何でも……』

「何でもありませんこの運命、苦労なんてしないわよ。それよりも羽入。これ見てみなさい」

『あう？』

梨花が見つけたもう一つの手掛かり。

その文献の下に書かれていた、『吉田松陽』という名前だ。

『よしだしよーよー？どうもこの世界では、著名人物をもじった人達が出てきますですね』

「そんなのどうでもいいのよ。見るとこれ、桂と高杉って奴の師匠……というか先生らしいのよ」

『……でっ』

「で？じゃないわよ。見ればこれ、処刑されたって書いてあるじゃない」

『それが罪と何の関係が？』

「さあ。だけど、調べる必要はありそうよ」

そう言っつて梨花は、図書館の受け付けに頼み込んで、攘夷戦争関連の本を片っ端から借りた。

「いつ返せばいいのですか？」

「いつかぁ……。どうせ処分する本だし、もらっつてっちゃっつてよ」

「みい、ありがとうなのです」

こうして本を（半永久的な方法で）手に入れた梨花。

万事屋に帰っつてゆっつくり読め……。と思ったのだが、

「み？新八、どうしたのですか？」

「ああ梨花ちゃん、おかえり。仕事が入っつて、今から行かなくちゃいけないんだ」

「仕事？」

そっつえば、この三人は万事屋なんだ。すっつかり忘れていた。

「ボクも行っつていいのですか？」

「え、だけど……」

「新ハイ、レディの頼みネ。潔く認めるアルヨ」

「うん、何を？」

「お仕事の邪魔はしないのです。だから……。みー、にぱーっ」

何とこの少女、天使スマイルで潰す作戦にきた。

ピュアな笑顔に、新八でなければ、男なら応じない筈がないっ！

「うん分かった。いいよ、行っても」

その三十秒後の出来事。

「アイツすんなり落とせるアルヨナ？」

「そうなのですね。ボクにかかれば、あんな男の一つや二つ……」

「お、言ったな？じゃあ次は銀ちゃんアル！」

「みーっみっみ。それくらいおてのものなのです　みーっみっみ……」

「・」

以上、女と女の会話。

「おーい、準備できたかあ」

「あ、はい。今行きます！！」

銀時のいる玄関へかけていく新八、神楽、梨花の三人。

「銀さん、仕事の内容は何ですか？」

「いや、それがな……」

「よかつたわー、他の仕事が入ってなくて」

始め、魅音が詞音かと思った梨花だが、志村妙という新八の姉だった。

「あら、この子誰かしら？」

「みー 古手梨花といますです」

「あらあら。お客さんとられないように気をつけなくちゃね」

「頑張ってくださいなのです。みばー」

しかしその天使スマイルが後の争いの種になる。

無論、妙も綺麗で美人だ。

しかし、梨花の天使にばーに寄り付くロリコンの方が多いわけであります……。

「ちょっとアンタ、調子乗るのもいい加減にしなさいよ」

まあ、何故こうなったのか不明だけど。

「み、みい？ボクは調子になんか乗ってませんですよ？」

「あのね、此処には美人よりロリコン好きの方が多いのよ？私に客がまわってこなかったのよね」

「ですが結果的に、人手が足りないキャバクラのキャバ嬢役をやってくれという依頼はこなしましたです。まだ不満があるのですか？」

「後その変な口調も腹立つのよね。どうにかならない？」

「……くすくす。じゃあこれならいいってワケ？」

まさかの黒梨花登場に、銀時以下万事屋三人震え上がる。（そもそも
も妙と梨花が喧嘩をしている時点で震え上がってるのだが）

「ええ。これで心おきなく話ができるわ」

「まだそんな事を言ってるのかしら？一介のキャバ嬢がこの私に勝

てるとでも？」

「・・・あんだと？」

既に先頭モードの妙に対して、スタンガンをはひそかに構える梨花。

というか、もうこんな物騒な喧嘩やめてくれ・・・。

「そっちこそ、ただのチビが、私に勝てるんでも思ってるわけ？」

「随分余裕ね。アンタには、そんな事言う暇なんて無いんじゃない？」

『あうあうあう。喧嘩は駄目なのです、あうあう・・・』

盛大に頷いている銀時。羽入が見えない人から見ればただの変人。

いつのまにか妙も手に薙刀を持っている。

ぱちりと鳴る電気の音に、釣り合うような黒い笑み。

あまりにも怖いが、新八が勇気を振り絞って言う。

「あ、あの・・・喧嘩はやめ」

「うるせーよ。女の戦いなんだよ」「」

新八撃沈。まあこうなるとは思ったけど・・・。

今にも飛び掛かる、あつ今！！

その時、

「お妙さー！ーん！！！！」

入口から入ってきた、ゴリラこと真選組局長、近藤。

気持ち悪い顔に、梨花はいつの間にか奉納演舞用の鍬を取り出して、

「いやあああああ！！！！！」

という叫びと共にぶつたいた。合掌。

しかしまた起き上がる近藤に、妙が鉄拳を浴びせて戦闘不能。

恐るべし、超黒笑顔組。

「さあて、帰りましょうです」

一瞬、梨花に二重人格を疑った銀時達であった。

『さっきの話、聞いてましたのですか？』

「羽入、梨花が唐辛子持つてるぜ。しかもハバネロ」

「そつよ？くすくすくす」

『にゅあああああ！！！！ごめんなさいなのです！！ごめんなさいあああ
あい！！！！』

羽入にも合掌。なーむー。

鬼殺し編 其の3 く女と女の戦いはいつ見ても恐ろしいく(後書き)

イメージは『暁の車』と『紅葉』でいきます！未来形です。
暁の車はガンダムの曲です。対象aとかにしるよ……。

次回予告。

少しずつ見つかる手掛かり。

梨花は、未来の部活メンバーと会話できる事に気付き、ある頼み事をする……。

あの、賽殺し編の梨花と羽入みたいなかんじです。

では、感想、評価よろしくおねがいします！

鬼殺し編 其の4 くいい加減な比喩はいずれその身をも滅ぼす (前書き)

作者は嘘つきです。

前回の次回予告で、部活メンバー出します！とか戯言を書きました
が……。

字数の問題で、次回にする事にしました。

すみませんでしたああああ m () m

鬼殺し編 其の4 くいい加減な比喻はいずれその身をも滅ぼす

「……つたく。声だけは詩音と魅音に似てるくせに、性格はとんだ大違いね……」

そのわりには最後二人でゴリラ倒してましたが!?

そう顔に滲み出す羽入を含めた四人。

とにかく、妙と梨花の間には、よく分からないけど何か繋がりみたいながあるんだろう。無いにしても、あんな物騒な喧嘩はやってほしくない、怖いし。

「喧嘩はともあれ、金が入ったんだし、今日は焼肉でも行くか?」

「そういつて月末までもたないんですよ」

「万事屋の主人が、金銭管理できなくてどうするのですか?」

「……分かった。大人の事情として聞き流せ」

「……分かりました。坂田銀時の戯言として聞き流すのです」

「……お前、俺の事嫌い?」

あ、そういえば。覚えているだろうか。

前話、神楽&梨花の女の会話を……。

標的、坂田銀時。

「そんな事は無いのです。ボクは、銀時の事は嫌いではないのですよ?みー、にぱー」

嬉々としてるなあ・・・いろんな意味で。

「そ。何か俺の事嫌いだったら、あのブラックスマイルで撃沈されてるかと思つてよ」

「神楽！なんなのですかあの人！」

「銀ちゃん・・・意外に強敵アルナ・・・。よし梨花、これを使うネ！」

「ボクは、ブラックスマイルなんてした事ないのでしょ？」

そう言つてブラックスマイル。おい、矛盾してるよー。

「・・・すみませんでした。やっぱり土下座・・・」

「しなくてもいいのです。お詫びの印に、これ、はいどうぞなのです」

銀時に渡されたのは、とある甘味屋のパフェ無料券。

甘味好きの糖分狂いである銀時は、それはそれは飛び上がらんばかりの・・・。

「あの人、頭すつからかなのですよ。みぱー」

「あれ期限とつくに切れてるアル。男つて馬鹿アルヨナ」

「まあ、精神的に女相手には、勝てないのですよ、男は。みーっみつみっみ」

・・・何か聞き捨てならない事を口走っている。

この二人をコンビにすれば、いずれ土方とか沖田にも被害が出そう

だ。無事な事を願う。

ちなみに、券の期限が切れている事を、銀時は甘味屋に行くまで気付かなかった。脳味噌にご愁傷様。

『あうあうー……。梨花あ、根本的に、こんな事してていいのですか？』

「あら、何の事かしら」

『だって……。キャバ嬢と喧嘩したり、銀時を色仕掛けで落とす暇があるなら、戻って本の続きを……。』

「喧騒こそが平和の印。あの喧嘩は、まあ出来心よ」

あの娘は、下手すれば小惑星一個は吹き飛ばしそうな強さだという事を、この少女は分かっているのだろうか。

まあ恐らく、妙にチビ（梨花に言わせると気にしてるらしい）とか言われて、梨花はほんの出来心だろうが、下手すると死んでます。

「しかしね……。未来にしか分からない事もあるのよね」

『あうあう。何ですか、梨花？』

「何で雛見沢に行った事のない人間が、雛見沢症候群にかかるのかとかね……。ああ、部活メンバーと会話ができれば苦労しないのに」

ま、無理でしょうけど。と話に終止符をつけて、倍以上の高さの銀時を見上げた。

『もしあの白夜叉が銀時だとすれば、とてつもない罪を背負ってる事になる。』

だとしたら、悲しみを腑抜けたような情で覆い隠している。羽入の

言ってた偽りの仮面って、この事かしら』

「・・・何だよ、梨花」

気付くと、そこにはむすーとした銀時の顔。

嗚呼駄目だ、どうやっても想像できない・・・。

「何でもないのでしょ。ところで、銀時は何故、木刀なんかさせてるのですか？」

「ん？まあ気分」

「銀さん、いつもはちゃんぽらんですけど、本当はすごい強いんですよ」

「ちゃんぽらん言うな」

強い？と首を傾げる梨花。

「剣術ですか？」

「あーはいはい。そうですよ。今はやってねーけど」

「じゃあ昔の腕が鈍ってない時なら、もっと強かったのですね」

「・・・そんな事ねーよ」

思ったよりも間が開いた。

驚いて見上げると、明らかにいつもとは違う横顔。

寂しさか、悲しみか、よく分からない表情。

「なるほど、観察力が足りなかったのは私の方ね、羽入」

『だから言ったでしょう？オヤシロ様は偉大なのです』

「そんな事、自分で豪語する神様程偉大じゃないのよ」

『あうあうあう……』

「冗談よ」

くすりと笑って梨花が羽入に言う。

まあ本当に偉大なのか、判断は他人に任せます。

「あ、じゃあ僕買い物行きますから」

「私も行くアル。新八いつつも酢昆布買ってきてくれないネ」

「最近金欠だったしね……」

年端もいかない少年少女なのに、下手すれば銀時より苦労してるかもしれない。いろんな意味で。

「銀さんと梨花ちゃんは？」

「イチゴ牛乳買って来てくれんなら、俺はいいわ」

「じゃあ、ボクも銀時に着いてくです。食事の楽しみはとっておくべきなのです」

「分かった。梨花ちゃんも買ってほしい物ある？」

『はいはいはいはいっ！！シュークリーム！』

羽入大興奮。五月蠅い。

「おねだりしてもいいなら……。シュークリームをお願いしたいのです」

『わーいわーい！！梨花あ、ありがたなのです！！』

「じゃあとつととその口閉じろ」

『あうあうあう……』

ぎろりと睨みつけられる。これは別の意味で怖い。

「じゃ、先に待ってるヨロシ。すぐ帰るアルヨ」

「了解」

「分かりましたのです」

ふう、とため息をつく。

買い物の誘いを断ったのは、銀時と二人になりたいから。

恋愛感情とかそんな物ではなく、梨花はある重大な事に気付いたのだ。

雛見沢症候群どうにかしないと、帰れない。

だったの二日で完全に馴染んだ梨花だが、よく考えたら帰れないのは困る。

ではせめてさりげなくでいいから調べよう。

と、こつこつという状況だ。

「そつといえば、昨日二人が、銀時の誕生日が近いと言っていましたがお祝いしなくちゃなのですね」

「別にいいよそんなの。誕生日って言ってもよー、単純に年が一つ増えるだけじゃねーか」

「まずお前は全国の純粹に誕生日パーティしてる奴にあやまるのです。そんな身も蓋も無い事を言っっては、新八と神楽が可哀相なのですよ?」

『そつなのですよ。誕生日を祝ってもらってる銀時は幸せなのです。』

ボクなんか祝ってもらえず、気付かれないまま何千年も・・・」

やさぐれてるなこの巫女・・・。

だが、祝えない理由もあった。

「あんた誕生日いつ？」

『あうっ！！！！』

「私聞いた事ないけど」

『あううっ！！』

「ご愁傷様だな」

『あうううううう・・・』

折れた。そう、よく考えたらこの百年、羽入に誕生日を覚えてもらった事がない。

「・・・昔なら・・・」

「みつ？」

「シユークリーム、俺にもくれよな」

『ボクが食べるのです！』

「食べてもらう、なのですよ」

『梨花の意地悪う・・・』

あはは、と小さく笑った梨花だが、さっきの銀時の呟きがよく分からない。

「羽入、アンタも聞こえてた？」

『シユークリーム あ、はい梨花、何なのですか？』

「縫い合わせたいわその口」

物騒な事を口走る。怖い怖い梨花。

『銀時の事でしょう？昔、が何なのでしょうか・・・？』

「帰ったら徹夜よ。心しておきなさい」

『あう・・・。ついでにワインですか？』

「あつたらいいんだけどね」

と、ひらりと赤い何かが落ちてくる。

それは、真っ赤に染まった紅葉だった。

「紅葉？微妙に季節外れなのですね。たしか紅葉は十一が・・・。
銀時？」

すたすたと歩き去る銀時の後を、慌てて追い掛ける梨花。

その顔を覗き込んで、一生懸命歩調を合わせる。

「どうしたのですか、銀時？」

「・・・紅葉は嫌いだから」

『嫌い？』

くすりと笑う羽入。

しかし梨花に睨まれて、押し黙る。

「・・・何故嫌いなのですか？」

「色、赤い。季節なんて、俺の・・・」

『「」・・・「」』

紡ぎ出される言葉はほぼ単語。

その変わりように、梨花も羽入もただ啞然とするばかりだった。

「ええ、えつと・・・」

『紅葉は』

振り返ると満面の笑顔の羽入がいた。

しかしその笑顔は、どこか複雑な感情が含まれていて・・・。

『美しく、艶やかに、しかしまた、儂く色づく。秋に赤く染まっても、すぐに散って、寒い寒い冬に入る。けれども、それは短い間だけど、人に見てもらいたいから色づいて、そして散っていく。皆、生きている事を教えたいと、ボクは思うのです』

「・・・羽入、アンタの例えは意味不明」

『あう・・・』

結構頑張ったのに・・・と羽入はしょぼくれる。

「・・・そして、貴方の大事な人も・・・。続きはこれか？」

『あう！？ええ、梨花が口を挟みさえしなければ・・・』

「・・・アンタハバネロフルコースの刑に処せられるの？」

だがしかし、梨花は銀時の言葉に耳を疑った。

コイツ・・・羽入が見えるだけでなく、心を読む力まで！？

と思っただが、どうやら違っらしい。

「昔な、同じような事を言われたんだよ。そいつはな、半透明で、巫女服を着た、薄紫の……」

銀時は此処で言葉を切る。

梨花もある人物に目を向ける。

ある人物は、首を傾げる。

「……お前だよ、多分」

『ひっ!？へっ?はっ?!』

「羽入、とりあえず落ち着きなさい」

『ぼ、ボクは銀時の過去に行く程、野暮な女ではないのです!』

「はははっ。ついでに何て答えたか、教えてやるよ」

見上げた銀時の表情は、後ろ向きで見えない。

梨花は、羽入と顔を見合わせて、それを待った。

「……俺の大事な人は、もう死んだ、ってな」

それは恐ろしく冷たい声だった。

まるで、まるで、

まるで、鬼のような……。

……いい加減な比喻は使いたくないものね……。

鬼殺し編 其の4 くいい加減な比喻はいずれその身をも滅ぼす (後書き)

あの甘味屋の券のやつ抜けば・・・。

とか今から言っても遅いのは分かってますが・・・(T|T)

羽入が紅葉について語る所は、意外に適當です。何かわかりませんから(- . - ;)

次回予告。

部活メンバーを絶対に出します!!

あ、だからって来るわけではありませんからね。
賽殺し編の梨花と羽入ですよ、イメージは。

では、感想、評価よろしくおねがいします!

鬼殺し編 其の5 くよくドジをおかす奴程、やる時はやる。(前書き)

事は火曜日、理科の時間……。

返ってきた解答用紙には32点の文字……。

そして昨日、国語の時間……。

返ってきた解答用紙には28・5点の文字……。

その後、ケータイ取り上げられ……。

お久しぶりですっ！

ケータイかっぱらって投稿！

本文をどうぞ！

鬼殺し編 其の5 くよくドジをおかす奴程、やる時はやるく

あれつきり何も言わなくなってしまうた銀時を必死になって追い掛ける。

「羽入！アンタが変な紅葉の話なんかするから！」

『なっ、それが何故ボクのせいに!?!』

つまらない言い合いをしていたら、またおいてかれる。

「銀時!?!ちよっ、おいてくななのですっ!」

しかし、人込みに紛れて、その姿を見失ってしまった。

「……まったく、どうしたのかしら……」

「ん？オメーさんは旦那んトコの……」

上から降ってくる声に渋顔のまま振り返る梨花。

声の主を見て、もっと不機嫌な顔になる。

「……エセS……」

沖田だった。

「言っなってんだ。Sはガラスの剣でイ」

「何かご用なのですか？無いのなら、ボクは帰らなくてはならないのですが」

「まあいいからちよっど聞けイ」

渋々ながらに、話を聞く事にした。

「真選組、仮副長の土方が、オメーさんに何て言ってたか知りたくねーか？」

「はい。仮じゃないと思いますけど」

「オメーの事、チビのつるつるぺったんって言ってたぜい」

・・・・・・・・・・。

「・・・ふふふふふふふ。さーて土方ア？どんなお薬の餌食になりたいのですかねえ・・・うふふふふ」

話をふった沖田でさえ近寄れない殺気。

注射器から液体をほとばしらせる笑顔の黒梨花。

何かもう、今ならあのお妙さんでさえ威圧で（実戦は無理）負けそうな程、その小さい身に黒い負のオーラを纏っている。

「フー事で、一緒に土方狩りしませんかイ？古狐さん」

「何で此処の世界の奴らは、古狸だの古狐だのッ！！私の名前は古手梨花よー！！」

まずお薬の餌食になったのは沖田だった。

非道にも見えるが、今のは沖田が悪い。

というか、いい加減喧嘩はやめてほしい。話が進まない（とは言ってもどうしようもないのだが）。

『あうあうー・・・梨花あ、ホントにやるのですか?』

「当たり前よ。私の一番気にしてる事を平気で口走るなんて、よっぽど死の淵が見たいらしわね・・・うふふふ・・・」

嗚呼駄目だ。完全にその気だ。

とりあえず後にできる土方の死体を思い浮かべて、静かに手をあわせた羽入だった。

「あれが土方ですぜイ」

「分かってますのですよ。それくらい。で、何をすればいいのですか?」

「無難に五寸釘とか」

「いや、鋸でゆーっくりと腕を切り落とすのはどうなのですか?」

「うーむ・・・腹を割って、内臓を引きずり出すとかいいんじゃないか?」

「おお!じゃついでにその内臓焼きましようなのです!!」

嗚呼・・・梨花が壊れてく・・・。

Sの会話というより、ただの拷問にしか聞こえない内容。

真選組一番隊隊長沖田総悟と雛見沢の鬼巫女古手梨花の纏うオーラはもうはんばない(大半は梨花のだけ)。

『梨花!!そんな事してる暇じゃないのです!!早く何とかしないと、一生帰れませんのですよ!!』

「!あ、そうだった。じゃ羽入、後10分待ちなさいよ」

そう言つて、沖田からもらつたマヨネーズに、注射器をぶっさして、中に注入する。

「ごめんなさいなのです。ボクは用事があつてお付き合ひできません。これを土方に渡してくれば、万事休すなのですよ?」

「何だつてんだ。つまんねえの」

「怒つては血圧が高まりますよ。お薬注入なのです」

さりげなく沖田にも注射する。

しかし中身は何なんだ・・・?

「オヤシロ様の化身はクールに去るのです みぱー」

「みぱーじゃねえよ。つーかこれ何の薬だ古手エエ!!!」

沖田の叫びも軽やかにスルーして、風の如く走り去つた。

「まったく、この私を騙そうなんて、百万年早いわよ・・・」

そう、あのつるぺったん発言は、全て沖田の嘘だった。

土方を共に狩ろうという物騒な考え方からだ。

面白そうかと思ひ嘘に乗つたが、まったく面白くなかつたので、問題発言をした沖田にも成敗を加えて逃げたわけだ。

『梨花は夢中になると周りが見えなくなるのです』

「ええええ反省してるわよ」

適当に返事を済ませる。

本当なら、ハバネロフルコースにしたいが、我慢我慢……。

特に会話を交わす事もなく、万事屋に着くが、羽入は、横の階段を上ろうとしない。

「どうしたの、羽入」

『ボク、ちよつと用事があるのです。先に帰っていてほしいのです』

「ふうん、分かったわ」

頭を下げる羽入にそれ以上何も言わず、さっさと中に入る。

「ただいまなのですー……」

そろそろと奥に歩を進めると、銀時がソファアに転がって眠っていた。

「あ……やつぱり先帰ってたのね……」

しかし興味はない。

向かいのソファアに座り、借りてきた本を開いた。

「吉田松陽……処刑された日とか無いのかしら……。嗚呼、つたく、羽入に頼んで調べてきてもらえばよかったわ……」

『梨花ちゃん』

「しかし・・・白夜叉が銀時とすると・・・、白夜叉は村塾に行つてたらしいから・・・」

『梨花ちゃん！』

「あーやだ、幻聴？おかしいわね、寝不足かしら」

『りーかーちゃん！！！！！！』

いい加減空耳ではないようだ。

声をたどると、先程本があつた場所あたりに、小さなビー玉くらいのガラス玉が落ちていた。

「・・・誰？」

『梨花ちゃん！俺だよ、圭一だ！』

いや何故！？

口を開けたまま何も言えない梨花に、圭一が言う。

『羽人が来て、梨花ちゃんが大変だから助けてあげてって。これに話しかけると梨花と会話ができるからってさ』

羽入、アンタやる時はやるのね・・・、と頷きながら思う。

後で絶対シュークリーム食べてやるっ。

「お願いがあるのです。吉田・・・という江戸の人が処刑された日と、古手神社の倉庫の何処かに、難見沢症候群の本があるはずなの

です。雛見沢に寄らなくても、感染してしまう新種のウイルスとかがあるか調べていただけませんか？」

『まかせろっ！部活メンバー総出で捜査にあたるぜ！』

「捜査ではないような気がするのですが……。よろしく願いますのです」

光が、ガラス玉の奥で光って、消えた。

・・・羽入、たまにはいい事するじゃな……、

人の気配を感じて振り返る。

「……あ……」

そこには雛見沢症候群L2……の坂田銀時がいた。

「みみつ。あつ、銀時！眠ってたのですよ、起こしたら悪いと」

「雛見沢症候群、江戸の吉田って人。全部聞いてたけど、何、それ？」

「気にしなくて大丈夫なのです。ボクを信じていただければいいのです」

「ふうん。吉田、吉田松陽は俺の師匠」

「違う吉田なのです。銀時の言う松陽ではありませんのです」

「江戸には、吉田なんて名字ないよ。松陽先生だけ。皆、攘夷戦争で人殺しやった奴の師匠の名前なんて、不吉だって言って改名する。おかしいよ、先生は優しく、暖かくて、不吉でも何でもない、俺達の父親だったのにさ……」

おかしい。どう考えてもL2の反応じゃない。

羽入は？アイツ肝心な時に・・・！

「銀時、確かにボクが圭一に頼んだ調べ物は、吉田松陽の事なので
す。けど、たまたま本で見つけて気になっただけで・・・」

「うん、いいよ。たまたま本で見つけて、俺が急に話しかけたから、
悪い事したんだと思っただよな？」

まあいろんな意味で悪い事してるけどね・・・。

自分自身の事に自分自身でため息をつきそうになる。

「はいなのです」

「よし、この話は終わり。新八達帰ってくるまでトランプでもやる
か？シュークリームを賭けて」

「シュークリームは『ボクなのです！勝手にもらおうなど言語同
断！なのです』羽入！いつの間に！！」

「ほう？じゃ負けたら今日の夕飯はキムチ鍋だぜ？いーのかなー？」

「ボクは全然OKなのです」

梨花にとってはどっちも得にしかならない。

羽入には地獄だが・・・考えただけで辛い。

『キムチは嫌なのです！！梨花あ、勝ってくださいなのです！！』

「さあ？ボクは辛いものが大好物なのですよ。わざと負けても損じ
やないのです」

「じゃあ梨花のペナルティは夕飯抜きでいいか」

「死んでも負けませんのです。部活メンバーじゃない銀時なんてい
ちころなのですよ。みぱー」

切り替え早っ！！

本を片付ける為、銀時には先に準備させとく。

と、見せかけて口実。

「羽入、よくやったじゃない。後でシュークリーム食べてあげるわ。……ところで、銀時の事なんだけど……」
『その事で……梨花、銀時は今、L3なのです』

抱えた本が、腕から滑り落ちた。

かくかくとロボットのような動作で振り返る。

「……え？何で上がったのよ？」
『分かりません……。ただ、ここ最近で、精神に変化があったのは事実です。……圭一の結果を、待つしかありません……。』

一冊一冊、丁寧に積み上げる。

この本を崩すみたいに、こんな訳の分からない世界の運命を破れたらしいのにね……。

鬼殺し編 其の5 くよくドジをおかす奴程、やる時はやる（後書き）

今日

『アンチクロロベンゼン』いいなー、とかいいながら書いたやつです。

ボカロ、ニコニコ動画で見ました

次回予告。

L3になった銀時の病状はあまりよろしくなく・・・。

圭一からの結果には驚きの真実が！

みたいな感じでした。圭一、変な出し方してすみませんでした。

では、感想、評価よろしくおねがいします！！

鬼殺し編 其の6 くガキと大人の戦いは、世界で一番醜い上に意味が無いく

ケータイ復活！

部活でのごたごたも終わって、清々しい気分です書いたから自信・・・
はないけど。

沙都子の口調が分からん・・・ちょっとひぐらし見てくる！

その間に、本文をどうぞ！

鬼殺し編 其の6 くガキと大人の戦いは、世界で一番醜い上に意味が無い

「いざ尋常に、勝負！」

という掛け声で始まったババ抜き。

キムチ鍋とシュークリーム、どちらを制するか of 戦い！（ちなみに梨花は負けたい気満々です）

「銀時、誕生日は甘味券でいいのですか」

「俺をそんなモンで釣ろうとしても無駄だぜー？パフェ一年分で」

「さりげなく乗ってるじゃないですか。あ、揃った」

「ばっかオメー、甘味券はたいてい一回限りが多いんだよ。……うち、一組も無しか」

「一年分は高いのです。お金がない子供には、お手頃価格のプレゼントなのでよ。……あ、私もそろわない」

「ただ誕生日はケーキで十分だったの。そっぴや、お前ってさ、どこから来たのよ？」

梨花の手持ちから抜いたカードを、ぽいと放る。

その上に重ねられる、同じ数字のカード。

……え？言った方がいいの？というかわわなくちゃ駄目？

「えっ……と……、もーちょっと西の、小さな村なのです」

「雛見沢、か？」

ぐ、と言葉につまる。

図星だが、なぜ銀時が知っているのか気になる。

「何故知ってるのですか？」

「別に、さっきの雛見沢症候群の雛見沢がそれっぽかったから」

「なかなかいい勘してるのです。でも銀時、そのお話はもう終わりでは？」

「ほい、と二枚のカードを捨てる。

ここからは心理戦。三枚のカード、ジョーカーは一枚。

「まあ確かにそうだな」

「まったくまったくなのです　ところで、ボクは銀時が攘夷戦争に出たと聞きましたが？」

「その話も無し。俺を動揺させようたってそうはいかねーぜ」

「やっぱり一筋縄ではいきませんですね　みぱー」

既に、ジョーカーの交換を約50回にわたって行ってる二人。

そろそろ決着をつけたいが……。

「あー苛々する！銀時、ちよつくら負けてくださいなのです」

「やだね、シュークリームは俺のモンだ！」

『シュークリームはボクの……』

「黙れ阿呆巫女！！！！」

『あうううう……』

そしてジョーカーは80回を超える。

長引きに苛々してきた二人が、羽入にあたる始末。

「しょーがないですねー、じゃあ公平にじゃんけんまで？」

「おー、いーじゃねーか」

ババ抜きじゃないし。じゃんけんするなよオイ！

「「じゃーんけん」」

「「ぼん！」」と二人出したのはチヨキ。

つまりあいこ。

銀時と梨花の視線が、一度空中ではちりと絡み合った。

二回目・・・三回目・・・(略)十回目・・・(そして略)五十回目・・・って、

「もういいわこんな勝負！！！！つーか何であいこにしかならないのよ！！アンタの頭私と同じ造り！！？」

「そーいう事になるな」

「一人冷静かこの白髪！！」

「やかましいわこのクソガキ！冷静で何が悪い何が！！」

「腹立つのよ。だいたいやかましいって何？そーゆうアンタはどうなのよ！？」

「いや銀さん大人だしー、そーゆーの気にしないっていうか・・・」

「それが問題だつて言ってるのよ！馬鹿！？貴方馬鹿なの？！」

『あうあう・・・銀時も梨花も落ち着いてくださいなのです・・・』

「「だから黙れ阿呆巫女！」」

『あうあう！阿呆巫女は無いのです！オヤシ口様を本気にさせまし

たね!！」

羽入参戦。梨花がハバネロを口に放り込み撃沈。

「さあて銀時。どんな方法で決着をつけましようかねえ……。うん、いつまでもこんな事する程、ボクは子供ではないのです。銀時もいい大人が年端もいかないボクと喧嘩なんて、恥ずかしい事山の如しなのです」

「いや、銀さん心は少年だし……」

「少年とかまだ言ってるのかバーカ。銀時にはプライドという物が無いのですか？」

「あっ、テメー今馬鹿つつたな!」

「プライドゼロじゃないですか」

じとーっ、と湿っぱい視線で睨む梨花。

む、と一瞬怯むが、三秒で立て直す。

「あーはいはい分かったよ。喧嘩はやめだ。……で、キムチ鍋は?」

「銀さん、梨花ちゃん。ただいまー」

「梨花、聞くアル!今日は奮発して、キムチ鍋らしいネ!」

「「「……」」」

結局、あの醜い争いは無駄であり、今晚の夕食はキムチ鍋に決まった。

「『そんなあああああ!!!!!!』」

合掌。羽入への拷問が始まる。

「最近寒いですからね。ぴりぴりして体が暖かくなります」

「万事屋で普通に肉が食える……。嗚呼、何度夢見た事か……」

「銀時、ボクがいる限り、肉なんかで変な争いはさせませんので
よ？」

「梨花も遠慮しないで食うアルヨ！」

『くゆー……。ええーん、ふええー……。』

約一名、本気で泣いてる奴がいる。

銀時と梨花は無視しているが、無論羽入である。

『辛いのですー……。辛いのですー……。誰か助けて神様仏様梨
花様あ……。』

「何戯言ほざいてんのよ。神様はアンタでしょ。好物、キムチ鍋の
余韻に浸らせなさい」

『あうあうく……。！』

泣き顔の羽入。そりゃ絶えずキムチの味なんてしたら、羽入にとっ
ちゃあ、地獄以外の何物でもない。

「あ、梨花ちゃん。シュークリーム買って来たからね」

「みー ありがとうなのです」

「新八、俺のイチゴ牛乳は？」

「銀ちゃんのも買って来たネ、心配いらないヨ！」

『あうあう シュークリーム』

「黙れシュークリーム星人」

浮かれている神様もとい阿呆巫女をさつとひと睨みして黙らせる。

「「「「「ちそーさまでしたー」」」」」

皆で手を合わせて合唱する。

ところで、圭一は結果を持ち帰ったのだろうか？

そつとその場を去つて、先程のガラス玉の所でしゃがみ込む。

「圭一、圭一？」

・・・やっぱりまだか・・・。

諦めて戻ろうとした矢先、

『梨花あああああああ！！！！』

「みいいいつ！？沙都子！？」

『ええ、圭一さんは、罰ゲームでレナさんにゴミ山へ連行されましてね。・・・というか、梨花は昔からよく厄介事に巻き込まれますわねえ・・・』

「・・・まあ、ある意味慣れました・・・。あ、沙都子、結果は？」

えつと・・・、としばらく間があく。

途中、ガサガサと聞こえる音は多分、メモかなんかだろう。

『ああありましたわ。雖見沢症候群に新型・・・というか、新種のもの無し、江戸の吉田が・・・、圭一さんのメモは字が汚くて読

無論、羽入が死にそうになる程悶絶したのは、言っまでもない。

鬼殺し編 其の6 くガキと大人の戦いは、世界で一番醜い上に意味が無い

おまけ ミツバさんと梨花ちゃんの会話

「ミツバ、ボクの自家製のキムチ、食べますですか？」

「まあ、ありがとう。最近私の自家製キムチは飽きてきちゃって・

」

「お礼なんていらななんです ミツバの七味煎茶はいつもおいしいのですし、この前だって、激辛せんべいを袋いっぱいくれたのですから」

「そお？じゃあ遠慮なくもらうわね」

「はい それが本望なのです」

ミツバと梨花は、絶対いい友達になる！多分あの激辛せんべいも、唐辛子パフェも、梨花は簡単に平らげると思う・・・。

次回予告

10月10日。言わず知れず、銀時の誕生日！！

という事で今回は、誕生日パーティーやります！！

後、圭一出すって前回書いたのに、沙都子出してすみませんm(

）m

沙都子の口調を練習したかったただけなんです、いや本当に・・・。

では、(最近多いので)誤字脱字&感想、評価よろしくおねがいます！

鬼殺し編 其の7 く誕生日だからって早起きしても、たいていやる事ないから

いや〜長かった!!

別にこの小説、銀さんの誕生日に合わせてようとか用意周到な話じゃありません！（暴露）

ただ単にケータイ使用禁止になって、勉強終わった22時から書いていて終了！みたいな感じですよ・・・。

では、本文をどうぞ！

鬼殺し編 其の7 く誕生日だからって早起きしても、たいていやる事ないから

「梨花ちゃん、今日は何の日か知ってるよね？」

「はい。三日も言われれば忘れませんのです」

「んじゃ当日。準備はいいアルネ？」

「」「誕生日大作戦、開始っ！！！！」「」

本日、10月10日。

言わなくても分かるだろうが、銀時の誕生日である。

そして時間は早朝6時。低血圧の銀時はまだ夢の中。

つまり、今が絶好のチャンスなのだが……。

「何の準備するの？」

という根本的な疑問にたどり着いた。

今は早朝、ド○キホーテでさえ8時に開くんだっていうのに、他の店が開いてるわけがない。

つまり、ケーキ、料理の材料、飾り、そして何よりプレゼントが買えない時間。

それら諸々が無いのに、準備なんて出来るわけがない。

「ま、これも性とゆー事でどうよ、ぱっつあん」

「って、結局じゃない。早朝に起きてする事あんのか、って私昨日言ったような気がするんだけど」

「気にしないネ、怒るとシワ増えるヨ」

「アラフォーか私は！こんな歳でシワ出来る奴見てみたいわよ！」

「いやいや、新八はつつこむ時シワが……」

「シワじゃありません、血管です」

と言う新八、もう既に血管がもうマスクメロンのよう。

とにかく、銀時が起きるまでいろいろすます事が……、

「おー、うっせえなガキども。朝っぱらから元気だなーおい」

ああああああああ！！！！

顔に絶叫を滲み出す三人だが、そんな事、銀時の前では言えないわけでありまして。

「お、おはようございます銀さん。珍しいですね、こんか朝早く」

「つつたく、せつかく寝てたのに、テメーらのせいで目え覚めちまつたじゃねーか」

新八、娘二人を止めなかつた事を後悔。あ、チャイナが現実逃避してる。

「銀時、ボク達、妙に呼ばれて出かけるのです。銀時も、お買い物行ったらどうなのですか？」

「はあ？何で俺が……」

「甘味券と八バネ口地獄、どっちがいいのですか？」

ちろ、とハバネロ（籠いっぱい）を見せる梨花。

久々のブラックスマイルに、

「はい！よろしくどーぞ出かけさせていただきますー！！」

と屈するしかない銀時だった。

感心する神楽と、恐れのお新八。黒梨花再登場も遠くはない。

「あ、ついでに羽入もおまけしますのです」

銀時に耳打ちし、羽入を手招きする。

眠そうに目を擦り、『ふあああ・・・りかあ、何ですかあ？』と寝ぼけた声を出す。

それを強制的に叩き起こし、また銀時に言う。

「羽入は、江戸を知り尽くしてるのです。羽入はこれでも凄いのですよ？」

「ふうん。んじゃ、俺の相手、してくれるか？」

『ボクを誘いこんで、一体何をしでかす気なのですかー！？』

「アンタまだ寝ぼけてるわけ羽入」

ぎろり、と睨み据えると、銀時の後ろにさっと隠れる。

「ま、使えなくても役には立つのです。ぞんぶんに振り回して結構なのです」

『ほお、楽しそうなのですー』

「んじゃ、今日は羽入とランデブーってワケか夕方くらいまでか？」
「はい。できればなのですが」
「了解」

小さく敬礼的な何かをする。

それに笑顔で返す梨花。

「さあて、こつちの問題は解決なのです」

「あのさ、取り込み中悪いけど、腹減らね？」

「「「あ」」」

朝飯食うの忘れてた・・・。

干物、味噌汁、卵焼きなど、準和食の朝飯を、皆ほぼ無言で食べる。

理由は簡単。話の拍子に誕生日の事がばれたら・・・。

輝かしい一日が一瞬にて崩れ去る。

「銀ちゃん」

「なに？」

「何か話してヨ。私、沈黙嫌ネ」

「うーん、無い」

「無いって何アルカ」

大きな青い瞳を、きゅっと細める。

可愛い、と思わずガン見する梨花。

「銀さん、夕方までゆっくりしててくださいね、外で」
「ソーアルヨ。ゆっくりして、腹空かせて帰って来い」
「部活か」
「ツツコミが微妙なのです。みぱー」

三人分の笑顔を背に、羽入を引き連れて、出て行った。

・・・さてと。

「今何時？」「八時」
「どうすんですか、何処も開いてませんよちょっと」
「仕方ないのです、八時だし」
「掃除しますか」
「・・・ちよつとね」
「何か料理の材料無いアルカ？」
「無い。あるけど卵と干物と米と調味料しかない。もう皆無」
「ケーキは買うのですか？まあ、手作りという手もありますけど」
「買う。材料買うとプレゼントが買えない」

・・・どんな計画だ？

ようするに、金が無いから料理もケーキもやばいかもしれないという状況だ。

悩む新八に、梨花がぼんと手をうつ。

「あ、ではボクが、ケーキを無料でもらってくるのです」
「え、どうやって？掻っ払ってくるの？」
「そんな不粋な真似しませんです。ま、見ているのですよ」

かくゆう、二時間後。

「いらっしやいませなのです」

メイド服に身を包んで、にっこり笑いながら小首をかしげる、何とも可愛い仕草。

場所はとあるケーキ屋、込みカフェという、言ってしまうえばエンジンモーターみたいな感じの所。

天使スマイルに客が・・・客寄せホイホイかこの女は？！

「梨花ちゃんにこんな特技があったとは・・・」

「新八、女を見くびるとろくな事無いネ、注意するヨロシ」

結果、

約一時間の接客で、五倍もの売り上げ。この結果からして、客はほとんど男だったが。

そしてタダ同然で、ショートケーキ（しかも1ホール）に、何か大量のシュークリームを貰う。

「どんな物です　　みい　　」

ブイサインを出す梨花に、同じようにブイサインを出す神楽と、ただ感服して呆然とする新八。

それを梨花がチョップで直し、次の計画に進む。

2、プレゼント。

「僕は・・・湯飲みにでもしますか。銀さんの湯飲み、ひびが入ってるし」

「私、結野アナの写真買ってやるネ」

「ボクは甘味券にしようなのです。餡蜜無料券でも」

と、デパートに買いに行くが、

「湯飲みって一言に言っても、迷う時は迷いますね」

「銀ちゃんイチゴ好きだから、これなんかどうアル？」

「女々しくないですか？無難に桜柄もいいのですよ」

決まらない。迷う。

新八の瞳が、湯飲みの端から端まで動く。

「あ、これ」

そう呟いて手に取ったのは、紅葉の柄の湯飲み。

「秋ですし。銀さんの誕生日も秋ですから、調度いいでしょ」

「中々いい目をしてるんですね」

「ま、新八が目利きよくてもいい事無いネ」

さらりと毒を吐き、首を振る神楽。

さて、残りは神楽と梨花の二人。

しかし、写真と甘味券なんて、そう迷う必要もなく、簡単にすんだ。

3、飾り。

とりあえず、輪飾りとかを作る事にした。

百円ショップに三人で入り、パーティーセット的な何かを探す。

「新八！このキラキラしたやつ可愛いネ！」

「でも、手作り感が無いね・・・」

「輪飾りがいいんじゃないのですか？手作り感あるし」

「新八、でっかいクラッカー買わないとぶっ殺すアルヨ」

「八つ当たり?!」

パーティーグッズのエリアから、馬鹿でかいクラッカーを一つ持ってきて、カゴの中にほうり込む神楽。

新八も、折り紙一式をカゴに入れる。

「こんなものかな？」

「早く帰って作らないと、時間がありませんのですよ!」

「ちゃっちゃとすませるネー、早く帰るアル」

「じゃあ、僕は料理の準備するから、神楽ちゃんと梨花ちゃんは輪飾り作っててね」

「はいなのです」

「了解っ！」

まず、梨花が折り紙を一枚ずつ細く切る。

それを、神楽が一つずつつけていく。

まず、梨花が折り紙を一枚ずつ細く切る。

それを、神楽が一つずつつけていく。

「・・・皆、毎年こんな感じで祝ってあげてるのですか？」

「うーん、毎年というか・・・。銀ちゃんと会ったのが去年の春で、誕生日も一回しか祝ってないアルから・・・。」

「きつと銀時は幸せ者なのです。こんな優しい家族に囲まれて」「もー梨花ったら照れるアルヨ！」

ふざけ調子で梨花の背中をばんばん叩く神楽。

そのため、ハサミをしばらくの間止めなくてはならなかった。・・・痛い。

「か、神楽・・・そろそろ作業に戻らないと・・・。」

「分かってるヨ、間に合わなかつたら最悪アル」

神楽の言葉に、残り少ない折り紙を、一枚ずつ切る。

神楽の作業は意外に早い。梨花もかなり急いでいるが、たまに追い付かなくなる。

「・・・と、神楽、折り紙が尽きましたのです」

「じゃあ繋げるの手伝うヨロシ」
「らじゃー、なのです」

指につく糊も気にせず、神楽に言われた通りの順番で、一つずつ丁寧に繋げていく。

「梨花！こっちは完了ネ！そっちは？」

「もーちよいなのです。・・・っと、やった！完成なのです！！」

声も高く、嬉しそうな声をあげる梨花。

それに「グツジョブアル！梨花！！」と答える神楽。

「あ、できたんですか？待っててね、こっちももう少しでできるから・・・」

時間は午後四時。銀時が帰ってくるまで、後約一時間。

4、実行！！！！

「ただいま・・・」

誰も居ない。あれ？と首を傾げる銀時。

羽入に目をやるが、当惑した様子で同じように首をひねる。

居間のドアが閉まっている。いつもなら開いているのに・・・。

引き戸を開けると、

ツパン！！！

と、大きな破裂音。それがクラッカーの音と認識するのに、しばらくかかった。

「「「誕生日おめでとおおおおお！！！！」」」

ひらひら落ちる紙吹雪の向こうに、綺麗に笑った三人の笑顔があった。

『 やっぱり銀時は愛されているのです ちなみにボクも銀時を連れ出すという面で協力していたのです！』

銀時の横をすり抜けて、笑顔が四つ。

「さ、此処じゃ何ですし、中に！ね？」

新八に腕を引かれて中に入った。

手作りで、温かみのこもった飾りが、居間を彩っていた。

「・・・これ・・・」

「輪飾りはボクと神楽が作ったのですよ」

「大変だったアル。でも、銀ちゃんの為って思ったら疲れなんて吹き飛んだヨ」

二人分のブイサイン。元気な笑顔に、思わず顔を綻ばせる。

「料理は新八！今日はごーかアルヨ？」

「梨花ちゃんがケーキを調達してくれたしね」

「あんなもの、ちよろいちよろいのお茶の子さいさいなのです
みー」

『あうあうー。いいなーなのです。ボクも協力したかったのですー。
』

ぶーっと口を尖らせる羽入。結構可愛いけど、梨花が睨んでるぞ。

「んじゃ再びっ!」

「『『誕生日おめでとっっ!!!!』』」

「・・・ありがとう」

はっぴばーずでい!銀時!!

おまけ プレゼント。

「銀さん、これ、一応悩んで選んだんで使ってください!」

「一応なのね・・・うん」

「はい銀ちゃん!結野アナのポストカード二十枚分アル!前ほしい
つて言つてたネ!」

「ああ、お天気お姉さんは最高だしな」

「では、ボクは甘味券、一年分なのです」

「ふうん、成る程・・・つて、なにいいいいいい!!!!?」

「しまった!梨花ちゃんには笑顔で媚びるという凶器が・・・」

「という事はほぼ無料でいただいたアルか・・・。よし、今度サド
に試ってみよう」

「みーっみっみっみっみっみ・・・。なのですよー」

よーするに黒梨花。

ほんとに終わり。

鬼殺し編 其の7 く誕生日だからって早起しても、たいていやる事ないから
ひそかな銀さんハピバ小説。

次回予告

27日まで残り一週間。銀時にも微妙な変化が……。そして、万事屋全員でババ抜き対決!!!! いったい何故!?

テンション高いですねえ……。

では、感想、評価、よろしくおねがいします!!

鬼殺し編 其の8 くマジカルバナナは続くと長いく(前書き)

お久しぶりっ！

結局夜中投稿・・・。

ケータイ&パソコン復活！

では、本文をどうぞ。

鬼殺し編 其の8 くマジカルバナナは続くと長いく

『銀時はとつても幸せ者なのです。楽しいパーティだったので
「そーか？だったら、祝ってもらってるこっちもうれしいかぎりだ
なあー」

『でも、ボクが楽しかったのは、梨花がケーキを食べてくれた事く
らいなのです。実体化したいのです、あうあうあう……』
「じゃあ、しろつての馬鹿」

鋭いツツコミが入り、『むう……』とどこぞの兄みtainな声を出
す。

時刻は夜中。もう少しで日付も変わるとい時間。

梨花は昼間の疲れか、もう布団の中。とい事で、今は銀時と羽入、
二人きりである。

デスクの前の椅子に銀時が座り、そのデスクの上に腰掛けるとい
体勢。

「……不思議だよな。ずっと昔、お前に会ったよな気がする。
夜、こつやつて隣に居て、俺スタンド嫌いだから、寝るまでいてく
れて……ま、多分だけど」

『ボクはそんな事する女ではないのです！』

「冗談だつて。本気にすんな」

『銀時は本気と冗談の境界線が見えませんが！あうあうあうあ
う』

とい、羽入の本気と冗談の境界線の見えない何かを聞きながら、

一人星を見上げる銀時。

「星がきれいだな」

『クサイ台詞なのです。いくら銀時でも変なのです』

「あ、てめっ、何言いやがんだ。俺がこんな台詞言って何がおかしい！」

『似合わないですよ！』

ずっぱり羽入に言われ、しよぼんとなる銀時。

面白そうな目でそれを見つめて、羽入も空を見上げる。

『確かに、今日の星は格別な気がしますのです』

「・・・そうだな。・・・なあ羽入、死んだ奴は、暗い地面か光る星。どっちに行くと思う？」

深紅の瞳を覗き込んで、ゆっくりと笑う。

『死んだ者は皆、星になって宇宙で輝いているのです。そして、その星の魂は、遣した者の願いを叶えて堕ちていくのですよ』

「お前の答え方は意味深だな」

『銀時が聞いたのですよ！』

ぷう、と頬を膨らまして反論する羽入。

「・・・そうか。なあ羽入、本当に皆、願いを叶える星になるのか？」

『・・・銀時は幸せ者なのです。でも、とっても可哀想な人間なのです。・・・ボクには、こうすることしかできませんが』

そして、半透明の手で、銀時の頭をゆっくり撫でた。

目を瞑り、銀時が静かに言った。

「……お前さ、スタンドのくせに温かい。不思議な奴だな」
『ふふ……、まったく、銀時は困った人なのです……』

あの時の温かみを感じながら、銀時は深い眠りについた。

「ほんと暇ね。羽入、アンタ何か用ある？」

『ありませんですーあうあうあう……。ん？あれは……』

暇で外をぶらついていた羽入と梨花。

と、羽入が何かを見つけたようで。

「あ、ツラ」

「ツラじゃない、桂だ。梨花殿、今日は一人か？」

「はいなのです。暇で暇でしょうがなくて」

『……桂は何か間違えてるのです。一人じゃないのです。二人なのです！あうあうあう！！！！』

「黙れ羽入」

すごい勢いで睨まれて、すすすと下がる羽入。

そんなのお構いなしに、梨花は桂に言う。

「ところで桂、お前も暇なのですか？」

「いや、神聖なる攘夷活動の最中だ」

「・・・どう見てもバイトにしか見えませんです」

「いや、もう終わりにする」

「・・・いいのですか。お金もらえませんか」

「いや、もう終わりにする」

「・・・やっぱりやめた方がいいんじゃないのですか？」

「いや、もう」

「いやいや五月蠅いのですよ愚民が」

ブラックスマイルとはうって変わって、超真顔で言っただけ。

きつい睨みに、ちよっぱやに支度を済ませて、敬礼的な何かをする。
いや、警察か。

「ところで梨花殿。今日は何の用で？」

「暇なだけなのです」

「・・・それだけだったのか」

「ずっとそう言ってますよ」

呆れ顔の梨花。精神年齢はどう考えても梨花の方が上だという事が、見ればすぐ分かるな・・・。

隠れ家へ案内してくれるという桂の好意に甘えて、ちよこちよここと後ろをくつついていく。

あ、そうだ。ところで・・・、

「桂って、指名手配犯なのでは？」

「ふん。真選組なんぞに、俺は捕まらんさ」

「はあ・・・。もし追い掛け回される事があっても、ボクは巻き込まないでほしいのです」

「その時は抱えて逃げる」

「いやだから巻き込むなって言ってるんですよ」

いくら百年の魔女であろうと、この電波攘夷志士の桂には（色んな意味で）勝てないという新事実。

というか単純に、ツツコミ所が豊富満載で、どこから手をつけていか分からないだけなのだが。

この前の日本家屋とは違う、何と云うかビルの中に入る。

門兵も手中のようで、すんなり中に入れた。

ビルの一室に案内され、とりあえず座る。

「待っている。茶でもいれてくる」

「おかまいなくなのです みぱー」

襖を閉じて姿を消した桂。

ここぞとばかりに、梨花は羽入との会話を始める。

「羽入、昨日銀時と二人きりのとき、何かあった？」

「別に何も……。でも、一つ気がかりなことが」

「何よ、言ってみなさい」

羽入はためらいがちに瞳を動かして、たどたどしい言葉を紡いだ。

『昨日、銀時に、この前の……。ほら、あの吉田という人の事なのです。それを謝ったのです……。銀時、何て言ったと思いますか』

？』

「知る由も無いわそんな事」

『銀時、こう言ったのです・・・』

『何それ？何の事だよ？』

「聞き捨てならないわね」

『偽りのない笑みだったのです。おそらく、嘘じゃないのですよ』
「嘘か本当かなんて、本人しか分かんないわよ馬鹿」

妥当な事を言われ、黙り込む羽入。

しかし、梨花もこの話には興味を持ったよう。

更なる質問を重ねようと、梨花が口を開くが・・・、

「梨花殿、茶と茶菓子だ」

ツラ再登場。片手に二つの湯飲み、もう片方に和菓子の盆を持ち、こちらを見ている。

後ろには開いたままの襖。

じっとするような視線。

・・・閉めろってか？私に閉めろと！？

「すまぬ梨花殿、閉めてくれないか」

結局かい！そんな目で見る前にそう言えばいいじゃん！！

はぁ・・・とため息をつき、腰をあげる。断ったら面倒そうだし。ばたんと襖が閉まる。

桂の向かいに正座して、和菓子に手を伸ばす。

「・・・桂、一つ聞きたい事があるのです」
「聞きたい事、とは？」

いつになく真面目な顔をする梨花に、桂も姿勢を正す。

「銀時は、攘夷戦争という戦争に参加していたのですか？」

「・・・梨花殿、何故そんな事を」

「それは・・・」

躊躇いがちに言葉を紡ぐ。

「きつかけはある本なのです。『銀色の髪に血を浴び、戦場を駆る姿はまさしく、夜叉』・・・ボクはこれが銀時としか思えないのです。興味本意が半分ですが、ある大事な事でその事を教えてほしいのです」

「・・・ほう、話しても構わないが、その大事な事を教えてもらえればな」

大事な事、紛れも無く雛見沢症候郡の事だ。

しかしそれを桂に言って平気なのか。

そんな梨花の心の内を読み取ったように、羽入が囁いた。

『桂には、言っても平気なのです。おそらくですが、協力してくれますですよ』

「……銀時は、病気なのです」

向かいで桂が目を見開く。後戻りはできない。

「ボクは、江戸の者では無いと言いましたですよ。ボクはもっと西にある、雛見沢という所から来ましたのです」

未来から、とは言わなかった。説明が面倒なだけだ。

「雛見沢に、そうですね、一時間もいれば感染します。雛見沢症候群には五段階の症状があり、酷くなると疑心暗鬼、行動の変化などが、そして最後は……」

「喉を掻きむしって死ぬのです」

その話を黙って聞いていた。

沈黙に、沈黙が重なる。

「ボクの話を、信じてください……」

「言われずとも、信じている。一つ、いいか？」

顔に安堵の表情を浮かべ、梨花が頷く。

「攘夷戦争の頃、天人に銀時が掠われた事があってだな、見つけた時には高熱で魔れていた。大事なのは此処からだ、どうも様子があ

かしいと思ったものだ。戦場での銀時は、それはまさに鬼みだいたったのを覚えている。

雛見沢症候郡には、疑心暗鬼の症状があると言ったな。まさに疑心暗鬼の塊だった。だが、不意にその症状が消えたのだ」

「消えた？」

「つまり、何時も通りの銀時に戻ったということだ」

急に、という言葉に反応する梨花。

『不思議なのです。雛見沢症候郡が約L4あたりから、L2まで自然に下がるなんてありえません。』

「そうね・・・」

「という事だ。何かあったら知らせろ。できるかぎりまで協力する」

「あつ、ありがとうございますなのです!!」

帰り際、桂が梨花に言った。

「梨花殿、その事は新八殿とリーダーにも伝えた方がいい。俺は銀時と古い付き合いだが、今のアイツの家族はその二人だからな」

「・・・分かりましたです。あの、一ついいですか？」

「何だ？」

「高杉、という人を捜していますのです。心辺りはありませんか？」

「高杉？アイツはやめておけ。ある事がきつかけで狂っている・・・」

「だが、左目に包帯をして、女物の着物を着た男が高杉だ」

「・・・ありがとうございます。では、攘夷活動頑張ってくださいなのです」

部屋に天使スマイルを振り撒いて、その場を後にした。

万事屋に帰った梨花は、異様な光景を目にした。

机を挟んで、三人が座っている。

真ん中のテーブルには、昨日、梨花が調達したシュウクリームの山。

「どうしたのですか？」

「あっ、梨花ちゃん。このシュウクリーム、銀さんが一人で食べようとして」

「・・・だから銀時は甘味好きの糖分狂いなのです。ばーか」

「何、八つ当たり？」

不機嫌そうな銀時。

それを眺めて、梨花が口を開く。

「マジカルバナナ バナナといったら黄色！ほら新八、続き！」

そう、マジカルバナナで決めようという魂胆。

ババ抜きとかこの前やったしねー。予告は嘘つきだ、うん。

「えっ！黄色といったらレモン！」

「レモンといったらすっぱい！」

「すっぱいといったら梅干し！」

お決まりの流れだ。順番は梨花 新八 神楽 銀時です。

梨「梅干しといったら塩！」

新「塩といたら海！」
神「海といたらリア充ベタベタカップル！」
銀「カップルついたら浮気」
梨「浮気といたら人妻！」
新「人妻といたら桂さん！」
神「ヅラといたらうぜえロン毛！」
銀「ロン毛といたら切りたい」
梨「切りたいといたら紙屑！」
新「紙屑といたらごみ箱！」
神「ごみ箱といたらゴミ！」
銀「ゴミといたらヅラの髪」
梨「髪といたら美容院！」
新「美容院といたらシャンプー」
神「シャンプーといたら目に入ると痛い！」
銀「目が痛いのは醤油」
梨「醤油といたら、ってもういいわ！！飽きたわよいい加減！」

新八にも劣らないツッコミ。

しかし皆思った。始めたのアンタじゃね？無意味な争い？

結局、シュークリームは皆でおいしくいただきました

めでたしめでたし。

あれ、ところで羽入は？

『あうあう・・・梨花、ボクの出番は？』

約一名、めでたしでない奴がいた。

鬼殺し編 其の8 くマジカルバナナは続くと長いく(後書き)

眠いんで早々次回予告。

次回予告

27日三日前。

銀時を早く悪化させる私!!

つーことでシリアス病み注意! にしたい。

では、感想、評価よろしくおねがいしますっ!

鬼殺し編 其の9 く小説の設定で面倒臭い設定ベスト3は、記憶喪失、死ネタ

私は死ネタ大好き人間ですよ。

タイトルは愚痴じゃないですよ！疑心暗鬼がめんどくせーんだよコノヤローってわけじゃないですからね！！！！

では、本文をどうぞ。

鬼殺し編 其の9 く小説の設定で面倒臭い設定ベスト3は、記憶喪失、死ネタ

10月24日。27日まで後三日。

固まっていた輪廻は動き出し、運命は時を告げる。

「先生」

「先生……」

「先、生……」

「待つてよ、行かないでよ、先生っ!!」

幻が心を蝕む。

幻聴が狂気を生む。

だから、彼はこう呟く。

「じめんなさい」

と、何度も。

やっぱり、二人には言った方がいいのか。

悩みに悩むが、まあ解決する術など無く、ま、いつか！と放棄した。

・・・いやいや、よくないだろーが。

「それにしても、銀時はお寝坊さんなのです」

梨花が銀時の部屋に視線を向けながら言う。

とは言っても、梨花のいる場所から銀時の部屋は見えないが。方向がそうなのであって。

「いや、銀さんはいつもこんな時間に起きるよ。低血圧だし、あの
人」

「ソーネ。だから新八、飯なんて待つ必要ないヨ、とっとと食うア
ル」

そう、只今午前9時。

そして正面のテーブルの上には、準和食の朝飯（&この前の残りであるシュークリーム）。

我慢の限界か、神楽が箸を構えて、

「いただきますツツ！！！」

と、片っ端から手をつける（というか貪り喰うの方が正しい）。

「みー、まったく神楽は食い意地が張っていますのです」

そう言う梨花も、ニコニコの笑顔で半分の量のご飯が入った茶碗を掲げている。

「やっぱり白米はおいしいのです にばー」
「食い意地とか言ってるわりには食ってんじゃん。めっさ食ったな米」

とは言いつつも、諦めたように新八も遅い朝飯を食する。

「お味噌汁がおいしいのです」

「干物に米に味噌汁……。旅館の朝餉アル」

「神楽ちゃん、馬鹿にしてる？」

新八が、口角をひくつかせながら言う。

「気にしないもんヨ！飯食うネ」

しかし、

「」「遅い！！！！」「」

さて、朝飯から2時間、午前11時。

まだ起きない。誰がって、銀時がだ。

「見に行こうか？」

「どうせなら三人で行くネ」

「賛成ーなのです」

という事で、右に新八、真ん中に梨花、左に神楽で並んで歩く。

「銀さん。起きてますか、銀さ……」

ガララッ、とすごい勢いで襖が開く。

「何だア？つたく、人の部屋ん前で何やってんだよ」

「おはようございますなのです……銀時、それは……」

梨花の視線は、銀時の首にくぎづけだった。

不器用に巻かれた白い包帯。所々、薄く血が滲んでいる。

「ん？ああこれか？や、何か痒くて掻きむしったら血がどばどばと
な。適当に包帯巻いて済ました」

首を掻きむしる。雛見沢症候郡L5……。

「羽入！」

『おかしいのです！おかしいのです！銀時は今、L3なのです！こ
れは間違っても何でもなく事実なのです！』

「あつ、馬鹿大声なんて……」

じつとこちらを見つめる赤い瞳。

ゆっくりと近づいてきて、目の前でしゃがみ込む。

「梨花」

「何なのですか？」

「L3って何だ？この前言った雛見沢症候郡と、何か関係があん

のか？」

「あ、ありませんので……」

ガンッ！

ふわっ、と一陣の風が吹いた。

身動きができない。僅かに目を動かすと、短刀が真横に突き刺さっている。

「嘘。あの時はうまくはぐらかしたけど、今日はそうはいかないから。なあ、梨花」

「銀さ……いったい何を」

羽入の声が聞こえない新八と神楽が、おろおろして事態を見つめる。

「う、嘘じゃないのです。本当に関係ないのです……」

「嘘つき」

事態に動揺しているのは、梨花も同じだった。

かつて白夜叉と呼ばれた男、坂田銀時にこの作戦が通用するか分からない。

が、

懐からスタンガンを取り出し、迷い無く銀時に押し付ける。

バチッ、と放電の音。

「なっ……！」

腕と短刀から抜け出し、取り出したのは注射器。中身はC120である。

手首にさし、薬を体内に押し込む。

「おやすみなさいなのです。みい」

今度はスタンガンを首筋に押し当てた。

弱い電圧だったが、薬の効果もあってか、ゆっくりと梨花に倒れこんだ。

「……梨花ちゃん。梨花ちゃんは、銀さんが何でこうなったか知ってるの？」

「……」

「L3、梨花ちゃん、一言もそんな事言っていない。それに、その注射器、何でそんな物……」

「……雛見沢症候郡」

響いた声は、いつもの子供の声ではなくて、

大人の女、否、百年の魔女の声。

「……話さなくてはいけない事があります」

「ボクが住んでいる雛見沢、そこには昔から、雛見沢症候郡という

風土病があります。その病は悪化すると、疑心暗鬼、人間不信、そして最悪の場合は、喉を掻きむしって死ぬのです。ボクは、・・・いや、私は、

信じてもらえないかもしれないけど、私は未来の人間。

雛見沢では、古来からオヤシロ様という守り神がいるという伝説があるの。L3の発言は、その馬鹿巫女もといオヤシロ様が言ったのよ」

「でも、私達には聞こえなかったネ」

「私は雛見沢の巫女。だからオヤシロ様を見聞きする事ができる。

銀時は生れつき知らないけどね」

「じゃあ、そのオヤシロ様は僕達には見えないの？」

「・・・いや、羽入」

真上で適当に話を聞いていた羽入が後ろに立つ。

『何なのですか、梨花？』

「実体化」

『・・・・・・・・・・』

黙ってテーブルの上を指さす。

そこには、銀時が起きてから食べようと言ってとっておいだシュークリームが乗っていた。

・・・食えって？私に？

『全部』

無理難題かこんちくしょー。

仕方ない。と腕捲くりして、片っ端から口に入れた。

10分後。

胡散臭げな視線を投げ付ける二人を無視し、最後の一個を頬張った。

『あー おいしかったのです』

「実体化！」

『はいはい分かったのです』

実体化したらハバネロフルコースだこの阿保巫女。

じっと見てみると、だんだん羽入の輪郭がはつきりしてくる。

外側から内側へ、やがて全身が半透明ではなく、くつきりとした実体になった。

「・・・お、お前がオヤシロ様？」

神楽の問い掛けに、羽入は満面の笑顔で答える。

「はいなのです！オヤシロ様改め、羽入と申しますのです」

「羽入、ちゃん？」

「改め阿保馬鹿巫女なのですよ。みぱー」

「梨花あ・・・」

ほほえましい会話は置いておけ。真面目な話！！！！

「難見沢症候郡の最大の難点。それは疑心暗鬼、幻覚、幻聴。回避は難しいですが、気をつけなといけません。少し調べたのですが、ボクは、10月27日だと検討をつけています」

「それって・・・」

ひい、ふう、みい、と新八が指を折る。

「三日後じゃないですか！」

「はい。なので、それまでどうするかを考えなくてはなりません」

「ボクは、何も無いフリをしたほうがいいと思いますのです」

「けど羽入、私、銀ちゃんに嘘なんて・・・」

「神楽ちゃん、嘘をつくのは辛いし、難しいよ。でも、銀さんを助けなくちゃ、ね？」

「馬鹿アルな新八、私が銀ちゃん助けられない程、馬鹿だと思ったアル力?!」

威勢のよい神楽の声に、笑顔で頷く新八。

「ところで梨花ちゃん、何でこの話を僕達にしてくれたの？」

「・・・実は、二人の前に桂に話をしました。そしたら、今の銀時の家族はあなた達だと。最初は正直、迷った。話さない方がいいと思った。信じてもらえないのが怖くて。だけど、そんな心配、今はかなぐり捨てたのです」

梨花の天使スマイルに、神楽、新八、羽入も笑顔を見せる。

神楽が拳を突き出し、

「よーし、一世一代の大作戦、名付けて・・・」

と意気込んだはいいが、腕を上げたまま固まる。

何かと思いきや、

「名前考えてなかったネ」

とぬかすチャイナ娘。

「何にしますですか？」

「面倒だし雛見沢症候郡撲滅大作戦でよくね？」

「迷案なのです あうあう」

若干文字が違うが、そこは目をつむろう。面倒臭いし。

「おいおいおい、シリアスな空気どうしたっ」

「気にすんなヨ。んじゃ、雛見沢症候郡撲滅大作戦開始アルツ!!!」

「「「「おーー!!!」」」」

この子供達は、つくづくお気楽なものだ。

あの巫女が実体化しているいきさつがよく分からないが、何か企んでいる事は間違いない。

だから、先程使った短刀を忍ばせて四人の所へ歩いていった。

人が、信用できないから、さ。

「あっ、銀ちゃん!」

神楽が叫んだ同時に飛び付く。

「おーよしよし。魔れてたアルヨー。大丈夫かー、泣いてたかー、お母さんがいるからなー」

「何その心こもってない言い方！」

つとめて・・・ではないだろう。自然な接しかただ。

「おー、羽入。実体化成功したんか。ちっせーなーオイ」

「ちっさくないのです！あうあうあう・・・」

羽入尻すぼみ。

皆笑顔だ。

10月27日まで、後三日。

鬼殺し編 其の9 く小説の設定で面倒臭い設定ベスト3は、記憶喪失、死ネタ

(作) 今更ですが、この小説は鬼殺し編とありますが、

(銀) とかつつーか、まだ一つしかねーじゃん。

(梨) とところで、台詞形式なのは何故なのですか？

(作) んー？気分。ですが、死に戻りもいちいち不幸の結末ではなく、ひとくぎりみたいな感じですよ。

(銀) ちなみに次は？

(作) と此処で次回予告！！

27日、早朝から姿を消した銀時を追い、梨花達は羽入の力で救へ。そこで見た物とは？

次回、鬼殺し編最終回！！

最終回つつても、外国の三部作映画みたいに中途半端な終わり方します。

ちなみに次のまとまりは『光消し編』です。

次は『心映し編』で次が『鎖外し編』で……。

(梨) ネタバレ終了なのです！！読者様の楽しみを消してどうするのですか！

(作) う……すみません。ではではシメは三人で！！

(作、銀、梨) 感想、評価、よろしくおねがいします！！！！

鬼殺し編 其の10 く秋って意外に寒いし雨が多いよね (前書き)

朝って寒いし眠いですよね・・・。

どーも、未だにベスト登校の作者です。

この度、鬼殺し編最終回です！

わーーーー・・・あれ、一人？

では、本文をどうぞ。

鬼殺し編 其の10 く秋って意外に寒いし雨が多いよね

10月27日。ついにやってきた。

朝5時に目覚まして起きた梨花は、低血圧でまだ寝てるであろう銀時の部屋に向かった。

早朝はやはり寒い。やっぱりもう少し布団の中にいればよかったと後悔しながら、冷たい廊下を裸足で歩く。

部屋の襖を数センチ開ける。

よく見えない。扉の間から風が吹き抜けた。

・・・ん？風？

深呼吸して一気に開けると、敷きっぱなしの布団、畳まれた寝巻代わりの着物、そして開け放たれた窓。

梨花は呆れにため息をついた。

そして一瞬の後、息を吸い込み、

「もういないのオオオ!!!?」

と叫んだ。いや、リアルに。

「銀さんは、いったい何処に・・・」

深く考えにふける新八。

今こそ冷静だが、先程まで動揺を絵に描いたような感じだった。

「梨花、27日に何かあるって言ってたアルヨナ？」

「はい、言いましたのです。どこかの本で読みましたのですよ。白夜叉の師匠、吉田松陽が処刑された日、つまり命日が、10月27日なのです」

「吉田……松陽？それって、萩の村塾！」

萩？と梨花と神楽が首を捻る。

ちなみに羽入はまだ夢の中だ。幸せ者め。

「ずーっと西の方にあっただよ」

「あつた？過去形アルカ？」

「燃やされたんだ。幕府の役人に」

息を呑む神楽。

すう、と梨花が目細める。

「つまり、その恨みで攘夷戦争に……。でよろしいのですね。では話は簡単なのです」

と、つかつかとある部屋に歩み寄る。

「……………羽入！！！！起きろコラアアア！！！！！！！！！！」

やばい程の大声で叫ぶ。

そしてそれに反応して跳び起きる奴が一人。

「はいいいいいいつ!!!!!!!!」

「よし起きたわね羽入。アンタ時間がどーのこーのできるんだから、瞬間移動なんておてのものよね？」

何をするのか、とおのきながらも、こくりと頷く羽入。

「じゃあ今日、萩まで三人。よろしくね」

「ちよ、ちよっと待つのです！明確な詳細が分らないと、瞬間移動なんて無理なのですよ!!!!」

成る程、まあ筋は通っているが……。

「村塾の場所を正確に知ってる人なんているのかな？」

「みい……。あ」

梨花の頭に、大分前読んだ本の内容が駆け巡る。

「桂!!!!」

「ツラ!? アイツが場所知ってるアルカ!?」

「銀時と共に、桂も村塾に通ってたのです。ある本で読みましたです」

それを聞いた瞬間、

「「じゃあ早く!!!!」」

と同時に万事屋を飛び出す。

慌てて、梨花と羽入も後を追いつける。

「しっ、新八！神楽！待つのです！」

「羽入、ちよつと黙りなさい。此処で止めるなんて無粋よ」

「あ、あうあうあう……」

「かーつーらーさああああああああ！……！」

指名手配犯の名前をこう叫んでいいのか謎だが、とにかく走り回って叫びまくる。

「桂さ……いた！桂さん！！！」

「ん？ああ、新八殿にリーダー。そして梨花殿……と、見かけぬ顔だな」

「梨花の遠縁なのです」

いやいやそんな事よりも！！

「ヅラ！萩の村塾の場所って何処ネ！？」

「そ、村塾？何故そんな事を聞くのだリーダー？」

「銀さんが朝からいないんです！梨花ちゃんが、前に読んだ本に、

銀さんは桂さんと吉田松陽さんという人の村塾に通っていたと……萩の何処ですか！？」

「しっ、新八殿……」

「じれつたいのですね！いいですか？もしボク達の知らない所で難見沢症候郡しーらになったら、喉を掻きむしって死んでしまうのですよ！？あなたは、銀時が死んでもよろしいのですか！？」

珍しく激昂する羽入に、驚きの視線を投げ付ける梨花。

しばらく考えていた桂が、閉じていた目を開け、言った。

「分かった。俺も行く。・・・そういえば、今日は先生の命日だったな・・・」

綺麗に色づいた紅葉が、ひらりひらりと舞っている。

五人は歩きながら話していた。

「調度この季節だ。銀時が村塾に来たのは。出会った日、10月10日を誕生日と決めてもらい、幸せだっただろう。だが、その一年後、27日、今日みたいに紅葉が綺麗な日。俺と高杉は夜半という事もあり、家に帰っていた。村塾には、先生と銀時、二人だけだった」

どこか遠い目をして、話し続ける桂。

「先生は、銀時の目の前で殺されたのだ。怯えた瞳で俺と高杉を呼びに走り、村塾に戻った。村塾が燃えていた。・・・とまあ、銀時が紅葉も嫌う理由もこれからだ」

「紅葉を？」

「炎で血のように染まった紅葉がな。・・・処刑の理由も、先生が幕府に銀時を差し出さなかった事が原因だったからな」

「え・・・っ」

神楽が小さく呻く。

新八も梨花も、羽入も声が出なかった。

「……とにかく、急ぐとしよう」
「……は、はいっ!」「」「」

薄く笑って言った桂に、四人揃って返事をした。

萩へ……。

特急電車をおりると、目の前はト田舎だった。

あ、電車のシーンが無いのは、皆乗ってすぐ寝たから。つまんないし。

「懐かしいな。さて、こっちだ」

ぽつぽつと雨が降る。

先程買った傘を開きながら、新八が呟く。

「……嫌な天気ですね」

「生憎なのです……。雨って嫌ですね。だんだん心に染みを作るように、塗り潰していくのですから」

羽入も言う。

小さな村に響く雨の音は、やがて大きくなり、傘に打ち付ける雨も強くなっていった。

昼過ぎに江戸を出たが、いつのまにか日は沈み、辺りは薄暗く陰っ

ていた。

「見えるか、あれだ」

ついと指さした先には、焼け落ち残骸となった建物。

よく見ると、その前に白がぼつんと居た。

「銀ちやつ、もがもが・・・」

銀時の名を呼ぼうとした神楽の口を、慌てて残りの四人が抑える。

「傘もささないほうがいいかもしれませぬね。雨の音が目立ちます」

「鋭いな。さすがは銀時が見込んだ男だ」

桂に言われ、はにかみながらも足音をしのばせて近付く。

「羽入、実体化一時解除。空気になったつもりで銀時に急接近行つてきなさい」

「あう、了解なのです」

すう、と空気に溶けるように姿を消す。

こうなると、梨花にもその姿が見えない。

運よく気付かれずに、目の前の木陰に隠れる。

「・・・先生、俺ね、ずっと思ってたんだ。紅葉の赤くなる時からずっと。先生、会いたいな。・・・会え、ないのかな？」

自嘲気味な声と共に、ガリガリと首を掻きむしる音が聞こえる。

新八が反応するが、押し止める。

「皆優しいんだ。優しさが、怖い。信じられない。不思議なんだけど、嫌なんだ。怖いんだよ……」

「惑わされるななのです。L5特有の疑心暗鬼なのですよ」

「最近ね、先生の幻が見えるんだ。でも、手を伸ばすと消える。声も、先生、笑ってるのに」

「幻覚、幻聴……」

桂が呟く。ある意味一番冷静だ。

「先生、会いたいよ、先生……っ」

銀時の声が急に涙声になる。

「そつだ」と唐突に声を上げた。

「先生、俺、先生の所に行くからね。絶対に……皆でね」

「……ん？と首を捻る。」

皆……。つまり、万事屋一同その他って事か？

「……行かないんですか？」

様子を見ていた新八が、桂に聞く。

桂は黙って首を振った。

「今の銀時には、声は届かない。無意識の内に遮断している、こっちに戻すのは一苦労だ」

「でも、L5の症状じゃないアルカ。首、掻きむしってるネ」

「またC120をうつ必要が……」

『梨花っ！！』

銀時を気にしてか、半透明のまままで梨花を呼ぶ羽入。

『首を掻きむしるだけじゃないのです。手首の自傷……つまり』
「リストカット!?!」

素っ頓狂な声をあげた梨花を、驚いたような目で見る三人。

「……羽入からの情報です。銀時は、雛見沢症候郡の症状である、首を掻きむしる行為の他に、その……」

「さっき言った、リストカット……?」

神妙な顔で頷く。

「……厄介な運命ね……」

呟いた声は、雨によって消えた。

ただ会いたくて。

神に願いを届けた。

ただ会いたくて。

居もしない神に思いを伝えた。

ただ会いたくて。

神が駄目なら直接、あなたの元へ向かおう。

残した者の、価値さえ知らず。

鬼殺し編〜End〜

Next 光消し編

鬼殺し編 其の10 〽秋って意外に寒いし雨が多いよね〽 (後書き)

(作) さて！無事に鬼殺し編も最終回ですね！

(銀) 無事、つーかよ。ぶつちやけ最終回のわりには区切りなくね？

(作) ぶつちやけ言わないでええ！！

(梨) ま、作者の実力がこんなもんなだけなのです。気にする事ないのでですよ。

(作) 気にするわ！・・・では、気を改めまして、次回予告！

光消し編突入！

萩での一件を終え、万事屋に戻る五人。

しかしそれから三日、銀時が帰ってこない！？

とか思ったら、L4に症状が悪化した銀時が・・・。

(梨) また中途半端な次回予告なのです。

(作) 気にしないで。では皆で！

(三人) 感想、評価、よろしくおねがいします！

光消し編 其の1 ㄱ事件前と事件後には必ず何かあるㄱ (前書き)

遅くなり申し訳ありませんでした!!

光消し編突入です! いきなりあれですはい。

今日はバスケの新人戦っす。

どーせ出ませんが、ネタ考えます(応援しろ)。

どうか私達にエールを!

では、無駄話は置いといて、本文をどうぞ!!

光消し編 其の1 く事件前と事件後には必ず何かあるく

光消し編

失いたくないから、奪った。

けど、奪うのが怖かった。

少女は聞いた。

「怖いなら何故奪うのか」と。

彼は答えた。

「約束したから」と。

日常の時計。

歯車が一つでも外れれば、動かない。

「ようするに、皆でってというのは、ようするに皆を殺すってゆう意味だと思えますのです」「

「ようするに二回言う必要あった?」

新八からの鋭いツツコミ。梨花にツツコミ役を取られても、未だに健在だな。

さて、新八、神楽、梨花、羽入は今、万事屋のソファアに座っていた。

あれから帰ったら夜中。夜通し話し合い、うつらうつらしたら昼だったというオチ。

「難見沢症候群は、疑心暗鬼の塊なのです。おまけに、マジックペンが注射器に見える程の幻覚。厄介な事この上ないのです」

「厄介厄介って、さっきからそれしか言っていないよ羽入ちゃん」

「馬鹿の戯言ね」

「あうあう……」

二人からの妥当な意見に、羽入黙殺。

「とにかく、銀時が戻るまでまだ時間はあると思いますのです。それまで今後の方針を話し合つのです」

「……帰って来ない……」

ソファーに丸くなる一同。

あれから三日、10月31日である。

もう冬並の寒さ。平均気温がガンガン下がる。

「ごむいよー……。新八いい……。飯にしょーネ」

「うん……。銀さん、何処に行ったんだろ」

一回も帰って来ない銀時を心配してか、新八がつぶやく。

「辛気臭い空気もよくないと思いますのです。多少は明るくいきましようなのです」

「……そうだね。よし！ご飯にしようか」

「わーい！！！！」

食いしん坊二人、神楽と羽入がバンザイする。しかし幸せそうな顔だな……。

前に食べたのと同じような朝食を平らげて、再び重い空気に包まれる。

「……桂さんにも電話する？」

「多分知らないからいいアル」

「……そうだね」

完全ダークネスな一同。

いつの間にか、外は雨模様。細い糸のような雨がゆっくりと地を濡らす。

「あつ！洗濯物！！」

雨音で我に帰った新八が、慌てて立ち上がる。

そのまま奥に消えるが、すぐにまた、こっちに戻ってくる。

「ぎぎぎぎぎぎ銀さんが！！！！」

「何！？銀ちゃんアルカ！！！！」

新八の話によると、洗濯物を取り込もうとベランダに出た。そしたら、傘もささずに歩いている銀時の姿を見つけたらしい。

「間違いじゃないのですよね？」

梨花が言った瞬間、

ガララツ、と音をたてて扉が開いた。

「おつかえり銀ちゃあああああ！！！」

何も言わない間に、三人を押しつけて扉を開けた人物に飛び付く神楽。

「ただいま。離れる、濡れるぞ」

「いーもん。銀ちゃんいなかったから淋しかったネ」

神楽が言つと、銀時は哀情を笑顔にした。

「銀さん、びしょびしょじゃないですか。待つてください、今夕オ
ル持ってきますから」

「イチゴ牛乳って、あつためるとうまいアルカ？ホットイチゴ牛乳
にするネ」

「神楽、ボクがやりますのです。神楽はそうやって、銀時とにゃん
にゃんしてるといいのです」

「俺は猫か・・・」

語尾を濁して、いきなり膝をつく銀時。

「銀時？」

「・・・いや、悪い。目眩がした」

「早くホットイチゴ牛乳作りますのです。新八もすぐ来るでしょう
し」

そう言つて、奥の台所へ向かう。

「ちよつと羽入」

『あう・・・何なのですか？』

「アンタ何半透明になつてんのよ」

『・・・気分なのです』

気まぐれ巫女をキムチで黙らせ、冷蔵庫を開く。

「イチゴ牛乳・・・イチゴ牛乳・・・。何このぱつとしない中身」

ほぼすつからかんの冷蔵庫を眺めて呟く梨花。

「あ、あつた。えつとこれを・・・」

戸棚をあさり、新人が誕生日に贈った紅葉の湯飲みを取り出す。

そるにイチゴ牛乳を入れ、レンジにいれてチンした。

「さあてこんなもんよね。後は」

後ろを振り向くと、銀時の姿。

否、鬼のような顔をした・・・、

振りかぶつてた木刀を、一気に振り下ろす。

避ける暇もなく、ガツという音をたて、梨花の頭に直撃した。

鋭い痛みと、暗くなる視界。

最後に闇の奥で、銀時が自分を見下ろしているのを、梨花は見た。

血が床を濡らす。

奪った。失いたくないから、奪った。

まだだ・・・まだ、

銀時は血を流し、床に倒れている梨花に目をやった。

戻れない。もう、

戻レナイ　。

光消し編 其の1 ㄱ事件前と事件後には必ず何かあるㄱ (後書き)

(作) 短いすかね、今回は・・・。

(銀) まあ行き当たりばったりだし？お前がほったらかしにすつから。

(作)・・・m) m

(梨) 光消し編突入なのですね いきなりダークネスですが、大丈夫なのですかネタ？

(作) 大丈夫大丈夫！ちゃんと『咎狗の血』で杉田のヤンデレは勉強済みだし・・・。

(銀) 別作品かよ。

(梨) 銀魂じゃ、ヤンデレなんて出ませんからね。

(作) とにもかくにも次回予告！

梨花に続き、新八、神楽も順に『奪って』く銀時。

そんな銀時に、オヤシロ様である羽入が・・・。

はい、次回は銀さん中心の物語！ご期待ください！
では皆さん一緒に！

(三人) 感想、評価、よろしくおねがいします！

光消し編 其の2 く神様は間が抜けてるから可愛い・・・のかな?? (前書き)

ぐっもーん 作者こと咲亜です！

朝って眠い・・・ざっと仕上げたんで色々駄文ですが、是非読んでください！

では、本文へどうぞ。

光消し編 其の2 く神様は間が抜けてるから可愛い……のかな??

自分が犯した罪。

許されない。

なら、もうどうでもいいや。

「はあ……はあ……っ」

奪うのは怖かった。

けれど、この手で梨花を殴り倒した後では、恐怖など奈落の底だ。

戻れないんだ。

壊した物は、もう元には戻らないように。

梨花は夥しい量の血を流しているが、死んでるわけではなさそうだ。

悔恨などいらぬ。

ただ、無関心でいればいいんだ。

「銀さん？梨花ちゃんのホットイチゴ牛乳飲みましたー？」

自分を呼ぶ新八の声が聞こえる。

台所を出て、扉をぴつたりと閉める。

「あれ、銀さん。ちゃんと飲みました？梨花ちゃんは？」

「昼飯作るから邪魔するなって。逆らうとブラック来るぜ絶対」

「あはは、そうですね。ひと眠りしますか？布団敷いてきます」

そそくさと奥に向かう新八。

足音を忍ばせて、そつと後をつける。

ぺた、ぺた……。

裸足の足音が、電気のついていない廊下に響く。

すう、と障子を開くと、新八の姿が目映った。

暗闇の中、新八の白い首に手をかけた。

「……………っ!!」

ぎぎ、と骨が軋む音がする。

悶え苦しむ姿を無視し、ぐつと力を入れる。

「が……………あ、ぎ……………ぎんさあ……………」

首を締め上げている銀時の腕に、新八の手が触れた。

左腕　着物で隠れていた手首の包帯が、銀時の目に映る。

「 ! ! ! 」

目を見開いて、ぱっと手を離す。

新八はゆっくりと倒れ、ぜいぜいと荒い息を繰り返す。

「 あ . . . ああ . . . 」

「 ? 銀ちゃん? 何してるアルカ . . . ? 」

神楽の視線が、床の新八に向かう。

戸惑いか、恐怖か、揺れた瞳を銀時に向ける。

「 銀ちゃ . . . これ、銀ちゃんが . . . 」

「 さい . . . ごめんなさい . . . ごめんなさい . . . 」

そして一瞬にて、懐の短刀に手を伸ばす。

抜いて、神楽の腹へ突き刺す。

「 ぎ、んちゃ . . . ん? 」

どさりと音が響く。

全て『奪って』しまった。

「 . . . いや、後一人。 」

「 . . . 貴方は、それを本当に望んでいたのですか? 」

静かな声、振り返ると、実体化した羽入の姿。

妙に心臓が脈打つが、気のせいだと考えを打ち消した。

「……失うのが怖かった。だから、奪った。……でも、今は奪うのさえ怖い」

「怖いのなら何故奪ったのですか？」

「約束したから」

馬鹿げた話だ、とでもいいだけに、ふふつと笑う羽入。

「……だよ、何か文句あんのか？」

「文句なんて滅相もない。私はただ、感情任せに人を傷つければ、後々後悔するのは自分と言いたいだけです」

気のせいだろうか。今羽入の目が赤く光ったような気がした。

……面白くない。銀時は短刀を持ち替えると、そのまま羽入に斬りかかった。

振り下ろした、手応えは無かったどころか、短刀が動かない。

羽入が顔の前で、短刀の刃をつまむようにして防いでいた。勝ち誇ったような笑み。

「夜叉の名を持つが、一介の人間が鬼の私になんて勝てないのですよ」

あいている片方の手で銀時を突き飛ばすと、いつの間にか奪った短刀を喉元にあてる。

だがすぐに下ろし、くるりと後ろを向く。

「大体、約束なんて不確かな物を根に持つ貴方も馬鹿ですよ馬鹿。もつと現実に忠実に……って銀時、聞いてます？」

銀時を振り返ったが、もうその姿は忽然と消えていた。

「……あれ？」

羽入も先程の余裕は消え、きよろきよろと辺りを見回すが、いないものはいない。

そんな事より、梨花、新八、神楽をどうするかが問題になる。

「……桂に連絡いれますか」

神妙な顔で頷いて万事屋を出た羽入だった。

(梨) 羽入の神様モードを書いたつもり? 作者。

(作) ん? 神様モード? 何それ、おいしいの?

(銀) 戯言だな作者。

(作) ひどっ。

(梨) あ、後ね・・・。

銀時!!! アンタ私に何しとんじゃコルアアアアア!!!

(作) ... はい、銀さんの粛清の間に、次回予告いきましよう!

桂の隠れ家的アジトで目が覚めた梨花達。

姿を消した銀時をさがしに、大江戸を走り回る!

んじゃ三人でいきましよう!

(三人) 感想、評価よろしくおねがいます!

(作) ところで銀さん平気?

(銀) 何とか・・・。

(梨) みーっみっみ

光消し編 其の3 く肝心な事ってたいてい気付かないく (前書き)

お久しぶりです！

今日珍しく試合に出たので眠いです！

今回はあれですね、緩和です。

では本文をどうぞ！

光消し編 其の3 く肝心な事ってたいてい気付かないく

鈍い痛みと共に眠りから覚めた。

頭が妙に痛い。

自分は一体どうしたのだろうか、見慣れない天井を見つめて思った。

瞬間、

「だあああああああああ!!!!!!」

奇声をあげて、百年の魔女、梨花は跳び起きた。

「お、梨花殿。気付いたか」

「桂!? ぼ、ボクは一体・・・」

「今新八殿とリーダーに、羽入殿が説明しているが、梨花殿には俺から話そう」

そして桂は銀時の発狂、それが原因の傷の事を話した。

「どつりで・・・」

頭には包帯が巻かれ、右目には眼帯がしてあった。

桂曰く、「血が目に入って炎症をおこした」らしい。

「百年の中で初めてかもしれないわ殴られたなんて・・・。腹裂かれるのは何回もあったけど・・・」

「梨花殿？」

「あ、いや・・・」

慌てて話を逸らし、今度は銀時の事を聞く。

「よく分からぬが、一瞬のうちに姿を消したらしい」

「あんのクソ巫女・・・逃がしやがって・・・」

「まあ梨花殿、そんな酷な事を言っていたら、攘夷活動はできんぞ」
「する気ねーし。基本ボクは犯罪活動なんてしませんです」

「銃刀法違反なら、軽く犯してますけどねえ」

唐突な声で、反応が遅れた。

首だけで振り返ると、腕を組み、にやりと笑う羽入の姿。

「・・・・・・」

怒りとも呆れともつかない表情で前に向き直り、キムチと箸をとりだしてもしかもしや食べ始める。

「桂、新八と神楽は？」

「奥の部屋だが・・・呼んでくるか？」

「おねがいますのです」

そして、辛さでむんぞりかえっているオヤシロ様に目を一瞬だけ向け、さっさと部屋を出ていった。

「しつかりなさいよ。アンタだってオヤシロ様でしょ？仮にも鬼の神様でしょ？」

「その神様の弱みを利用する巫女もどうかと思いますのですが・・・」

無駄口を叩く羽入にキムチの瓶を突っ込み、胡座をかいて座る。

「梨花、あの、女の子なんて正座にしたら……」

「五月蠅いわね、私の勝手でしょ」

「あうあうあう……」

片足に頬杖をついて羽入に言う。

「……ちよつと事態を説明しなさい」

「は、はい……」

「よく分かりませんが、銀時の心情に何か変化があったのか、L5が発症しましたです。別に、それが原因で人を襲うのは分かりますのですが……」

「が、何よ」

「新八の首を締め上げている時、新八が銀時の左手首に巻いてあった包帯を見つけました。……ですが、その包帯を見た銀時が、急に締め上げるのをやめたのです」

「成る程、確かに不思議だわ。……もしかして」

「銀時は、雛見沢症候郡の狂気に堪えられていませんが、……おそらく、手首の自傷は、それを抑えるため。消えない、罪の証なのですよ」

「じゃあ銀時はL5でありながら、自我を保っているの？」

「不思議なですね……」

他人事みたいな言い方で腹立つ。

腹の中でふつつ何が沸騰しているが、ひとまず理性という水を入れて抑える。

「梨花ちゃん！」

「梨花！よかつたネ！全然目え覚めなくて・・・」

「ボクは大丈夫なのですよ。それよりも二人は・・・？」

「首締められたくらいで弱音なんて吐けないよ」

以前、超内臓圧迫されたしな。

「そうネ！ちよつと腹に穴あいたくらいでぶつくさ言えないヨ」

こっちは夜兔族だし・・・。

私の周りにはタフな人間ばかりだな・・・とこつそり洗面顔。

「梨花、銀ちゃん何処行ったアルカ？」

「それはですね・・・羽入、説明」

羽入に向き、顎でしゃくる。

さつきキムチを瞬間大量食いをした時の悶絶をぴたりとやめ、こつきゅこつきゅと机にのっていた水を飲みほした。

「銀時ですか・・・。実は何処にいるのか不明なのですよ」

「・・・え？」

「その後、一瞬にして姿を消したのです」

「アンタそれ、その一瞬後ろ向いてたかららしいじゃない。どづい
う事？」

「し、しまったのです！誰から聞きましたのですか!？」

「勘よ。そんな事はともかく、L5で疑心暗鬼の塊が町を歩いているのよ？言い換えれば殺人鬼がナイフ持ってほっつき歩いているようなものよ」

「マジでか」

そう呟く神楽の頬を、一筋の汗が流れる。

「マジよ」と返して、梨花は口を開く。

「銀時が私達を襲った理由は？」

「約束、らしいのです」

「・・・約束？」

新八が首を捻るが、ややあって「あっ」と声を漏らした。

「銀さんが寺子屋のお墓に言っていたあの・・・」

『先生、俺、先生の所に行くからね。絶対に、・・・皆でね』

・・・。。。

「・・・約束？約束なのそれ」

「相手は死人ですからね・・・」

「とにかく、今後の被害を考えなくては」

羽入の言葉に皆考えこむ。

「大まかな被害は無いと思います。でも、夜間に歩いている人くらいなら、平気で斬ってしまいそうですね・・・」

「おい眼鏡、確証はあんのか確証は」

「神楽ちゃん今そんな場面じゃないから」

調子にのったチャイナ娘につっこんどいて、また梨花達に向き直る。

「……でも、何か忘れてる気がするんですね……何か……」

「そういえばヅラは？」

沈黙を破ったのは神楽。それに新八が答える。

「ああ、さつき出掛けたよ。用事あるって」

「アイツの事ネ、また真選組に追われてるヨ」

「……ん？まって神楽、真選組……幕府……処刑……」

はてなが浮かんでいた新八、神楽、羽入も、あっと目を見開く。

「……真選組……」

先生を殺したのはだあれ？

誰かが幕府の奴って言っていた。

……なら、

真選組の奴ら、殺しちゃっても、いいよね？

先生……！！

光消し編 其の3 く肝心な事ってたいてい気付かないく (後書き)

(作) いやあ、話も大分進みましたねえ。

(銀) よく言うぜ。こつそりBLACK CATと銀魂のクロスオーバー書いてたくせに。

(作) な、何故知って!?

(梨) 世の中には知らなくていい謎もあるのです みぱー

(作) な、ななな?! むう、ルーツはしらんが・・・まあいいとして!

また次ですが、銀魂とBLACK CATのクロスオーバーにしよ
うかと。

(銀) うぜえ、クロスオーバー。

(作) 何か言ったか天パ?!

(梨) 銀時と作者が喧嘩を始めたので『梨花! へるぷみー!!』はい、嫌なのです

次回予告にうつるのですよ。

情け容赦無しで真選組を切り捨てる銀時。

疑心暗鬼の夜叉に梨花達は・・・?

(作) はあ、はあ、ああもうえらいめにあった。

(銀) ふう、ふう、はあああ・・・疲れた。

(梨) 二人とも年ですね。みいい

(作) で、では三人でいきましょう!

(三人) 感想、評価、よろしくおねがいします!!

光消し編 其の4 くヤンデレと病みの違いって何？デレてんの？（前書き）

最近、咎狗の黒スケかどうかは知らんが、ヤンデレ書くのうまくな
ってるような気がする。

・・・気のせいか。ども、作者です！

今回・・・あの、あれです！注意報発令！

・ 銀さんぶっ壊れます。

・ 銀さん病んでます。

・ 銀さん何か怖いです。

・ 銀さん何かひぐらしチックで笑い方変です。

以上を踏まえた方、本文をどうぞ！

・・・でも、俺も地獄に行くんだろっな。

・・・先生？でもいいよね？

「先生の仇、とつてもいいよね・・・？」

「真選組か・・・。可能性としてどれくらい？」

「攘夷戦争に参加した理由が、吉田松陽の処刑だとすれば、低くはないのです。とくに、今の精神状態だと・・・。」

「・・・じゃあ、早く真選組行つた方がよくない？」

新八の言葉に、ハツとなった一同は、大急ぎで真選組へと向かった。

「あ、多串くん、総一郎くん」

「誰が多串だコラ」

「総悟です、旦那」

勝手に頓所の中に入りうるうるしていると、いきなり副長と一番隊隊長に会う。

・・・まあ、いいか。先にこいつらだけでも・・・くくくくつ。

「旦那ア、どうしたんですかイ、真剣なんか持ち出して」

「廃刀令法完全に無視してんな・・・つたく」

ああ、五月蠅いなあ・・・。

早く、早くその顔を苦痛に歪ませたい。ふふっ・・・じゃあ、

殺っちゃおうか。

「多串くん、魔刀令法なんて無視しても気にしなくていいよ。・・・
だって」

すらりと刀を抜く。銀色の刀身が眩しい程光っている。

「真選組、みーんな殺しちゃうからさア！」

一気に振り下ろす。土方が慌ててそれを受けるが、若干押され気味だ。

楽しいなあ・・・。楽しいよ！

「ぎ・・・っ、銀時・・・？」

「旦那・・・何でこんな・・・」

何で・・・？愚問だよ。

「幕府が松陽先生を殺した。幕府の狗のお前達も同罪なんだよッ
！！！！」

「松陽・・・！お前、まさか白夜叉・・・！？」

「っ！呼ぶな！お前らが松陽先生の名を呼ぶな！俺の名を呼ぶなア
アアアアア！！！！！」

怒りに任せ、一旦引いた刀を横風ぎに振り払う。

土方の胸に、赤い横一文字を残す。

「しつ、新八っ！頼所まで後どれくらいなのですか!？」

「もう少し!」

「羽入！アンタ飛んで先行きなさい!」

「あつ、あいあいさ!」

半透明の姿に戻ると、ふわりと宙に浮き、どこかへ飛び去った。

「着いたヨ！梨花!」

頼所の戸を叩くが、反応は無い。

痺れを切らして新八が扉を押す。

「!!!!」

辺り一面、血の海だった。

先に飛んでいた羽入も、空中で茫然とそれを見つめていた。

「……あ、これ、って……」

「あれ、新八、神楽。お前ら、何してんだ?」

聞きなれた声。だが、不安感を煽るトーン。

振り返ると、血に濡れて、それでもなお薄い笑みを浮かべている、銀時の姿。

「ぎん……さん?」

「ん?何?ふふ……これ、どう思う?俺さ、先生の仇、やっとな

「つたんだよ?」

くくく・・・と不気味な笑い声をたてる。

「銀さん・・・これ全部銀さんが・・・?」

「そうだよ・・・。どう?結構これ疲れたんだよね。でもさ、これが結構楽しいんだ。ふ・・・っく、はは、あははははははははっ!」

空を仰いで、狂ったように笑い出す銀時。

それでなお、黙って見つめている新八達に、銀時は言った。

「・・・何だよ、何か言えよ。お前らは、真選組みみたいな幕府の狗みたいに、俺の事を鬼なんて言わないよなア?」

「言わない・・・ヨ。私、銀ちゃんの事信じて」

「・・・お前には、聞いてない。天人が幕府を狂わせた。その幕府が先生を殺したんだ!!」

「銀・・・ちや?」

「呼ぶなっ!俺の名、を、呼ぶ　　っあ!!」

急に頭を抱えてうずくまる。

しゃがみこんで苦しみだす銀時に、慌てて近寄る。

「ぎ、銀さん・・・?」

「ぐ・・・う、ああっ、・・・めだ・・・駄目だっ!」

そっと近づけられた手をぱしりと叩いて、よろよろと立ち上がる。

「・・・だ、めだ・・・。もう俺は・・・。・・・ない・・・時間
が、ない・・・」

か細い声で呟き、屯所の塀を一気に飛び越えた。

「あつ、待て！・・・どうしますのですか・・・？」

「追いかける。絶対追いかける」

決意の横顔に、梨花は笑って頷いた。

「羽入！アンタ空から探索ね！」

『はいつ！』

自分が自分じゃなくなる前に、

血に濡れる前の紅葉が見たい・・・。

光消し編 其の4 くヤンデレと病みの違いって何？デレてんの？（後書き）

今回の投稿はPCなので、セリフ形式ではなく普通にすまします！
銀さん本当にすんまっせんでしたー！！！！

次回予告。

高杉登場！

祭りの中。人の声も遠く聞こえる紅葉の木の下で、高杉は銀色をみつけた。

一方その頃、梨花達も祭りに着き、銀時を探す。

どうぞご期待！

もう一回！すみませんでしたああああああああ！！！！

では、感想、評価、よろしくおねがいします！

光消し編 其の5 くオリキャラってこれどう思うっ？ (前書き)

あれ？昨日投稿しなかったっけ????の作者です。

えっと、昨日投稿したと思ってしてなかったやつです。

気付いたのがさっきという・・・うん。

昨日テストの後だったんで早めに(でも11時)に寝たんですよ。

・・・多分それだ！

美代ちゃんですよ。では、

本文をどうぞ！

光消し編 其の5 くオリキャラってこれどう思うっ？

空に探索に行かせた羽入からも、何も報告は無し。

梨花、新八、神楽も、また別方向に走ったが、全然見つからない。

半分諦めかけた、その時だった。

『梨花！あ、新八も神楽もいるのですか！』

いったん合流した所に、羽入が飛んできた。

「どうしたの？羽入？」

『こっちです！』

指をさしてスピードも速く飛んでいく羽入において行かれないように必死で追いかけて、やがてたどり着いた場所は大きな神社。

太鼓の音が響き渡る祭囃子。そう、祭りの最中だった。

「・・・此処？」

すう、と実体化し、一つ頷く。

「はい。確かに見ました」

「・・・羽入ちゃん。鶴岡八幡宮とこの神社、どっちの方が大きい？」

かなりどうでもいい質問を新八がする。

だが、その質問にも律儀に答える羽入。

「この神社ですね。徳川の方が代々眠っている大きな神社です」

「・・・頑張れば見つかるネ。羽入、空からの探索れっつらごー」

「あいあいさー」

気の抜けているのか、よく分からないやり取りだ。

「よし、じゃあまた分かれて探そう」

「はいなのです」

「おうネ！」

頼もしいく声を張り、三方向に分かれた。

紅い。

紅葉を見上げ、高杉晋助は唐突に思った。

あれから十数年、あの人の事を、忘れた事など一度もない。

目に焼き付いている。あの日の真っ赤に染まった紅葉の色。

「あ・・・あのっ」

はじめ、誰に言っているのか分からなかったが、自分しかいない事に気付き、振り返る。

紫がかった長髪の少女。

開口一番。耳を疑った。

「銀髪で赤目の男の人を知りませんか？」

銀髪・・・赤目・・・銀時だ。

「アイツに何の用だ？」

「知ってるのですか！・・・あれ？」

呟くなり、自分の顔をまじまじと見る少女。やめてくれ、穴があき
そうな視線だ。

「包帯に女物の着物を着た小柄な男・・・。タカスギシンスケ？」

「・・・誰から聞いた」

「ヅラ・・・桂からなのです。今、銀時が大変なのです。時間があ
りません。お願いです、手伝っていただけませんか?!」

ぱつと頭を下げる少女。

袂をたつた仲とはいえ、大変、時間がないと言われれば、協力しな
いでもないかもしれない。

「・・・で、何が大変なんだ？」

「手短に言いますが、銀時は病気で、今にも首を掻きむしって死ん
でしまいそうなのです。・・・それだけは先に言っておきますので、
手伝っていただけるのなら早く足を動かしてほしいのです。ボクは
これで失礼するのです」

最後の星の意味がよく分からないが、ぺこりとお辞儀をして走り去

る少女を黙って見ていた。

首を掻きむしる・・・？死ぬ・・・？

話が読めない高杉だが、興味本意で探す事にした。

とりあえず、この紅葉林にはいない事は・・・いや。

考え直し、もつと奥に足を向けた。

今の季節、アイツがあの日を忘れる筈は無い。

だから・・・。

前だけを向いて歩く高杉の視界の端に、きらりと何かが光った。

ふいと視線を向ける。

紅葉を見上げ、首を掻きむしっている銀時がいた。

「・・・銀時」

小さく呼ぶと、首だけで振り返る。

「・・・あ、た、高杉・・・？」

弱々しく掠れた声。

「高杉・・・だよな・・・？」

切なげに歪んだ表情。

・・・いったい何があった？

「高杉・・・頼む・・・。俺が・・・俺じゃ、なくなる前に・・・。俺を、殺してくれ」

最後の言葉が、妙にはっきりとして聞こえる。

「もう嫌なんだ・・・。人を傷つけたくない・・・なのに、俺の中の何が・・・血を、求めている・・・。嫌なんだよ・・・っ」

今まで、自分はこの様な銀色を見た事があるか・・・？

いや無い。この事態に、一番戸惑っているのは紛れも無く自分自身だ。

とりあえずあの少女を呼んだ方がいいのか・・・？

泣きじゃくる銀時に目を向ける。

首からの血が、地面を赤く染める。

本当にどうしよう、と思った矢先、

「銀時っ！」

声をあげて駆けてきたのは、先程の少女。

「あーもうっらー!?ありがとうございますのですが、やっぱり時

間が無いのです！」

半分パニックってる少女を、高杉は呆然と見つめた。

その時、今まで自分の袖を掴んでいた手から力が抜ける。

崩れ落ちる銀色。少女が慌てて駆け寄った。

「銀時！？銀時っ！！」

しかし目を閉じたまま動かない銀時。

はぁ、とため息をついて、立ち上がる少女。

「羽入。羽入！！」

「はっ、はいっ」

巫女服を着た・・・羽入、が走ってくる。結構危なっかしい足取りだ。

「梨花、どうかし・・・、あっ、銀時！どうしてこんな・・・」

「オヤシロ様のアンタが知らなくてどうするのよ。新八と神楽に伝えなさい。銀時が見つかったって。ほら早く行く！！」

「は、はい！」

と、また危なっかしい足取りで駆けて行く羽入。

・・・何なんだ一体。

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。古手梨花なのです。今か

らこの事態について話すので、よく聞いてくださいね」

「と、つまり、銀時は病気なのです。さっきも、真選組で・
いや、それは後で。あなたも攘夷志士なのですよね？アジトみた
いな所ありますのですか？」

「ああ」

「そこに銀時を運びますのです。ボクは、羽入達に用があるので残
りますのです。高杉は、先に行つて、手当でもしててくださいな
のです」

こんな若い少女に従つてる自分が情けなくなるが、首の傷口に気を
つけながら、銀時をおぶる。

青白く、冷たい手を握ると、強い力で握り返してきた。

魔れているのか、譫言ばかり呟いていた。何を言っているのかは分
からなかったが。

何で苦しんでいるかは大体予想がつくが、一人で抱え込むのはやめ
てほしいものだ。

「・・・銀時、俺は此処にいる」

小さく、しかしはっきりと言ってやった。

高杉の手を握っていた手がほどけ、後ろで規則正しい呼吸が耳に入
る。

ほっとため息をつき、先を急いだ。

さて一方。

「やっぱり銀時達についての方がよかったみたいなのです・・・」
もう既に鬼兵隊の船についてしまった梨花達一行。

「しかし、あの白夜叉が病気って、世の中物騒になったわねえ」
病気は物騒とか言わない。

言葉に合わない暢気な声をあげるのは、鬼兵隊N.O.2の黒葉美代だ。

「原因不明なのが厄介なのですよ。みい」
「何でこんなほんわかした空気流れてるの？鬼兵隊N.O.2の力？」
「だって隊長いなくてつまんない」
「よし、表でろ」

本気でキレ始めた新八。

とその時、美代の耳がぴくりと動く。

「隊長だ」

その瞬間、すぱぁん！と襖が開く。

「げ、美代・・・」
「突っ立ってないで、ほら準備はできてるからさ」

渋顔で銀時を、あらかじめ敷いてあった布団に寝かせる。

首から溢れる血を見て、神楽が息を呑む。

「どうする、何使えばいい？」

「傷自体はそれほど深くねえ。倒れた原因は失血のショックと熱だな。包帯で十分だ。コイツなら三日で治る」

「マジでか、リアルでか？」

首に包帯を巻き始めた美代の頭を、高杉がぶん殴る。

「いったー！何すんのよチビ！」

「っせーよ。早くやれ」

ちなみに作者の他作品からも分かると思うが、美代が173?で、高杉が170?になる。つまり美代の方が若干高い。

「……っと、こんなものかしら。んー、結構熱あるじゃない。でも、ここの指をくわえて見てるのも嫌よね。後は万事屋ちゃん達にまかせろわ」

「え、あ、はい！」

「任せるアル！」

美代はにっこり微笑むと、今度は梨花と羽入を向いて言う。

「梨花ちゃんも、とっても遠い所から初めて江戸に来たのに、よく分からない事ばかりだろうけど頑張ってるね。羽入ちゃんも、いつもみたいに梨花ちゃんの側にいてあげてね」

「はい。……で、何でボクと梨花が一緒にいる事を知ってるのですか？」

「あら」

あら、じゃねーよ。

既に動きはじめている新八達をよそに美代の笑顔を見る梨花と羽入。

「だって、あなた達よく見かけたけど、いつも一緒にいたじゃない」

・・・何でこの人、羽入が見えたんだろうか。

私よりよっぽど魔女かもしれない。そう思った梨花だった。

光消し編 其の5 くオリキャラってこれどう思うっ？ (後書き)

(美代) しかし私ってどの作品にも出てるわねー……。

(銀) おーい、何でいんだコイツ。

(作) 銀さん見つかりました！そして次回、他作品で出番待ち？の
アイツが……。

次回予告

可愛い銀さん目指します。

美代ちゃんと銀さん二人が多いです！

え？何で言いきれなかった？

もう書きちゃいました！

(梨) じゃあ早く投稿するのです！

(作) はい……手短に……。では、

(四人) 感想、評価、よろしくおねがいします！

光消し編 其の6 くシリアスの後のほのぼのって、作者の醍醐味?? (前書き

再びおはようございます、こんにちわ、こんばんは！
連続投稿でございませう。

まさかの白登場!!! (白を知らない方は『白夜又再臨編』 『傷
跡の白銀夜叉』を見てくださいな!)
可愛い銀ちゃん・・・ですかね・・・?

本文をどうぞ!

光消し編 其の6 くシリアスの後のほのぼのって、作者の醍醐味？く

屍 血 死体

血 血 血血血血血……。

分からない。攘夷戦争の中。

だが服装も何時もの着流し。あの白装束じゃない。

『これは、ただの夢……』

屍の中をゆっくり歩いていく。

行けども行けども血だまりばかり。鉄と、何かの腐臭が漂う。

『夢……か？こんなにリアルな夢……』

気が狂いそうな赤色。

ふと立ち止まる。

耳に、微かな呼吸が聞こえる。

すぐ下から。しゃがみ込むと、真っ赤に染まった人、がいた。

「待ってる、今助け」

『無駄だよ』

突如響いた自分自身の声。

若干高い。まさかと思って振り向くと、そこにいたのは白装束の自分。

『自分でも分かっているんだろ？これは夢だつて。なら、そいつを助けたつて意味ないよ』

「・・・けど、助けたい。あの時俺は、何も護れなかった。だからせめて・・・」

『罪滅ぼしなんて夢でする事じゃないよ。それよりも、キミは今の罪を償った方がいいんじゃない？』

「今？」

『あれ？あ、そうだ。忘れちゃだめだよ。此处で話した事、全部。そして、もう来ちゃダメだからね』

歪んでいく視界。最後だろうと叫んだ。

「なあ、此处はいつたい何処なんだ？！」

『・・・キミの心？ふふっ。じゃあまたね、銀時』

「あっ、」

銀色から紅が覗いた。

視界の端に彼女を見つけると、ゆっくりと首を動かしてそちらを見た。

「いやー、よかったわあ。隊長は三日って言ってたけど、二日で治っちゃったわね。銀ちゃん」

治ってはいない。

「生憎万事屋ちゃん達いないのよー。今は私だけ。．．．あの、私の事分かるよね？」

美代の問い掛けに、黙って頷く。

「よかったあ。んー、治ったけどまだ熱はあるわね．．．。」
だから治ってないったら。．．．ま、いいや．．．。

「何か飲む？アンタ二日間も眠りっぱなしだったし」

また黙って頷く銀時に、首を捻って美代が言う。

「銀ちゃん、アンタまさか熱で喋れない？」

ゆるゆると首を振る銀時。それに微笑んで、

「そっか。ま、無理しちゃダメだよ。水持ってくるね」

そう言って立ち上がろうとするが、着物の裾を引っ張られる。

「．．．．．は．．．．．？」

「へ？」

「一人は．．．．．やだ．．．」

空気に消えるような細かい声。

今まで見た事が無い声に、美代は笑顔のままぴきりと固まる。

「え、でも、ほら・・・すぐ近くだし・・・あの、ね・・・？」
「いや・・・側について・・・」

なななななななななな!!?!?

完全に当惑&パニックになっている美代。ある意味恐ろしい・・・。

「わ、わわわ、わ、分かった!一緒にいるから!万事屋ちゃん帰ってくるまでね!」

「・・・うん・・・」

安心したように微笑んで、裾から手を離す。

ダメだ!調子が狂う!落ち着け!クールになれ!クールになるんだ
黒葉美代!!

「あ!そつだ、包帯変えよつか!」

「包帯・・・?」

あれあれ?と首をさらに捻る美代。

覚えてない・・・?

「何があつたか、覚えてないの?」

黙ったままなのは、つまり肯定ととっていいだろう。

しかし、真選組を半壊滅させたとなんて、ましてやあの三人を傷つけたなど言えない。

なので、うまい口実を作っておいた。

「銀ちゃん、何かよく分からない奴らに注射うたれて、首掻きむしったらしくて……。出血多量、おまけに高熱ときた。まったく最近の連中は」

部屋の隅に置いてあった救急箱から包帯を取り出す。

「あ……。起きれる……。？」

美代が怖ず怖ずと尋ねる。くそ！早く帰ってこい万事屋！！！！

手について起き上がるうとする銀時を慌てて支える。まだ熱もあるし、体力が無いだろう。

「平気……。かな？あの、痛かったら言ってね？」

黙ったまま虚ろな視線を向ける銀時に失笑を返し、するすると包帯を取っていく。

途中、彼の肩が震えるのは、この酷い傷が包帯とくっついてしまっているからだ。

「あ……。もう、この前包帯巻いたの誰よ！……。私か。銀ちゃん、痛いでしょ？無理しないでね」

とにもかくにも、包帯を何とか外し（引っぺがし？）、新しい包帯に変える。

「よし！おしまいよ銀ちゃん！」

「・・・ありがと、美代」

「いやそんな！私ただ包帯変えただけだし・・・」

「・・・なあ、新八と、神楽は・・・」

「買い物よ。銀ちゃんの事知らせたら、きつて喜ぶだろうな・・・」

「俺、あいつらに・・・謝らなくちゃいけない・・・」

「ふえ？」

あれ？覚えてる？どっち？

「何か、罪を犯した・・・覚えてない・・・けど、アイツが教えてくれたから・・・」

「アイツ？」

訝る美代に、銀時は薄く笑って、

「いつも、問題ばっか起こすけど・・・、何時までも俺と一緒にいる奴・・・」

問題・・・隊長とか？でも何時までもって・・・。

・・・あ、そうか。

「大丈夫よ。万事屋ちゃん達、そろそろ帰ってくるからさ。ほら、いつまでも起き上がってないで寝る！無理は禁物、これ基本！」

「・・・うん」

少しの間起き上がるのも辛いのか、ほぼ倒れ込むようにベットに横たわる。

手を額にやると、・・・無理したせいか、少し熱が上がってるようだった。

「む・・・タオル変えなくちゃ・・・。銀ちゃん、少しだけいい？」

考えた後、こくりと頷く。

とりあえず水とタオルだけ持ってこようと急いでそれらを引っつかんで戻る。

「銀ちゃん！お待たせ！」

「ああ・・・ゴメンな・・・俺の為に・・・」

「ううん気にしない！平気？辛くない？」

「平気・・・」

額にのせてあったタオルに水を浸し、固くしぼる。

それを再び額にのせる。

「ただいま帰りましたー！」

「美代ー！いるアルカー？」

「あ！銀ちゃん、待っててね。万事屋ちゃん達帰ってきたからさ」

につこり微笑んで出ていく美代。

程なくして、勢いよく襖を開け、新八と神楽、そして隠れるようにして梨花が覗く。

「あ・・・そ、その怪我・・・」

「え？ああこれですか？まあたいしたことありませんよ」

「そうネ！そんな事より、銀ちゃんの方が心配ヨ・・・銀ちゃん、大丈夫？」

「ああ・・・ゴメン、」

ゆっくりと起き上がる銀時に、新八と神楽の二人が駆け寄る。

その二人を、まとめていつぺんに抱きしめる。

「・・・ぎ、銀ちゃん？」

「ごめん・・・ごめんなさい・・・」

肩を震わして啜り泣いている。二人は顔を見合わせて苦笑した。

「銀さん、泣かないで。僕達、見た通り何もありませんから」

「そーネ。まったく心配ばかりかける奴ヨ」

その光景を、襖のかげに隠れてじっと見つめる梨花。

「ふふ。家族水入らずを邪魔するボクじゃありませんのです」

そのまま去ろうとするが、不意に名前を呼ばれた。

「何で、来ないんだ・・・？」

「へ？だってその・・・」

「梨花も・・・悪かった・・・、初対面でもあんなに優しくかった梨花に・・・あんな事・・・」

「き、気にしなくていいのです！みみ、みい・・・」

「ほら、梨花・・・」

小さく手招きされ、恐々中に入る。

近くまで来て、いきなり腕を引かれた。

気付いたら、彼の温もりの中。

「みんな俺の罪だ・・・本当に・・・ごめん、な、さ・・・い」

最後の言葉はすうと空気に消えた。

腕から力が抜け、もたれかかっていた銀時を、新八が再び横たえる。

「・・・さて、とりあえず一件落着かな」

「うわ、熱高いヨ。美代ちゃんと看病したアルカ」

「したわよお、ていうか、帰ってくるの遅い！銀ちゃん淋しがつてたよ」

「・・・美代は銀時の事、銀ちゃんとも呼ぶのですね。意外なのです」

「はいはい。夕飯の準備するから、神楽ちゃんと梨花ちゃん、銀さん頼んだよ？」

「はい」

「今回のボク達の出番は・・・？」

「俺らはカットされやすい人材だから・・・」

哀れ、羽入&高杉。

（白）え、何？ゲスト？

（作）そーですね。自分もまさか出すとは思わなかったの……。

（白）まあ最初美代も出す気無かったしね。

（銀）……じゃアレか？今回は俺二人？

（作）……だね。いいじゃないか！

（銀）いいけど別に……。

（作）よし！じゃあ白たん次回予告！

（白）はいはい

次回予告

次回もほのぼのだね基本的に。

ちよいシリアスかな……。

あと、俺の出番は、無い！以上。

（作）……また出すよいずね。

（白）そりゃどうも。

（作）……こんなもんかな。じゃあ、

（三人）感想、評価、よろしくおねがいます！

光消し編 其の7 く何処にも人の代わりなんていないく (前書き)

すみませんでしたああああ!!!

梨花ちゃん女々しいです。

あれ、恋愛？的な描写大量です。

銀時×梨花注意報!!

えっと・・・皆逃げましたね？

大丈夫な方だけ本文をどうぞ！

光消し編 其の7 く何処にも人の代わりなんていないく

「・・・銀ちゃん、風邪ひいたら長引くタイプでしょ」

額に手をあて、美代がため息をついた。

しかし正確さに欠けるので、体温計を持ってくる。

「銀さん、お医者さんに診てもらった方が・・・」

「あの鬼太郎みたいな奴アルカ？ダメネ！アイツ怪しさ満点ネ！」

「神楽ちゃん、それ言いすぎ」

ピツ、と電子音がした。

「39.5お？運んで来た時は38だったじゃない。悪化した？」

「頭痛い・・・」

「このさい言っけど風邪よ」

「何か食べれます？」

「無理・・・頭痛い・・・」

目を閉じたまま答える銀時の額の汗を拭き、新しいタオルをのせる。

「とにかく、絶対安静アルヨ。ゆっくり寝るのが病人の仕事ネ」

少しだけ目を開け、一つ頷いてからまた目を閉じた。

直後、すうすうと小さな寝息が聞こえてきた。

「頭痛・・・なのですか。真選組でも、そんな症状がありませんで

したか？」

「梨花ちゃん、何で隠れてるの？」

「べっ、別に」

赤面してそっぽを向く梨花に苦笑を返す新八。

「頭痛かぁ・・・風邪じゃね？ただの」

「じゃあ、そういう事にしちゃいますですか」

「や、ポジティブ思考だなアンタら」

暢気に問題発言をした二人に新八がつっこむ。

「雛見沢症候群の副作用だと思えますのですよ。ま、それも曖昧で
いまいち正確さがありませんが・・・」

「むしろそっちの方が正確さがあるような・・・」

ぼつりと呟く新八のツッコミももつともだが、梨花は軽くスルーし
た。

「雛見沢では、こんな症例はありません。狂ったら狂ったまま。
歯車の欠けた時計のように・・・」

「梨花ちゃんほんつとすみません。約一名話についてけなくて寝て
ます」

え、と目をやると、床にごろりと寝転がる神楽の姿。

というか、こんな場面昔にあったような・・・。

「とにかく！逃げ出したりでもしたら一大事！だから看病ちゃんと
！って事？」

「美代の例えは意味不明なのですが、まあそういう事なのです。美代は銀時とごろごろにゃーにゃんにゃんなのですよ」

「あら、梨花ちゃん妬かない？」

「別につ！」

少しむきになりすぎたか、くすくすと笑う美代を睨み返すしかできない梨花。

赤く紅潮した頬を冷たい手が冷やす。しばらく頬に手をあてる。

嗚呼……調子が狂う……。

もしかして、私は銀時に恋愛感情でも沸いてるのだろうか？

いやない！無い！絶対無い！！！！

と、願いたいものだ……。

今、船には銀時と梨花二人。

「買い物がてら真選組のお見舞い行ってきます」

ちなみに、真選組連中は全員怪我だけですんだらしい。とはいっても、大体が全治一ヶ月とかの大怪我だが。

「真選組連中にざまーみろって言ってやる」

(一応)真選組に追われている美代もついていき、神楽もそれに便上して一緒に行った。

「それにしても・・・」

と、梨花は銀時の寝顔を見つめる。

「寝てるし暇だし眠いし・・・」

浅い呼吸を繰り返しているが、もう熱が上がる事は無いだろう。

だいぶ前に借りてきた本を広げるが、既に知っている事実。見ても何の得にもならない。

「また、皆でババ抜きしたいな・・・」

ふと前の事を思い出し、一人ごちる。

「厄介ね・・・本当に厄介。けど、この運命も破ってみせる」

でも、それには休息ね。最近ろくに寝てないし。

布団が見当たらないので、畳に直接寝転がる。

「寒い・・・布団、布団、っと」

結局、毛布を引っ張り出し、銀時と並んで横になる。

うとうととまどろんできたその時、か細い小さな声が聞こえた。

「・・・せんせい・・・」

「にゅ？」

隣から聞こえた。

起き上がって見ると、銀時が小さく震えながら魔れていた

「先生……やだ……行かないで……先生………っ」

ふい、と手が宙をさ迷う。

一瞬迷い、梨花はその手を握った。

ぐいっ、と抱き寄せられる。

ぎゅっ、と抱き着く銀時に梨花は赤面して小声で反抗。

「ぎっ、銀時?! なななな何……」

「先生……よかった……もう、置いてかない、よね………
?」

耳元で聞こえた声に、小声の反抗をぴたりとやめた。

行ってほしくないんだ。あの人に、置いて行ってほしくないのか。

「銀時……ボクに、松陽の代わりに出来るなんて、思ってません
です。でも、銀時が望むなら、このままでいいのですよ?」

「……先生……」

ぎゅっ、と腕の力が強くなる。

銀時の温もりに包まれたまま、梨花は久しぶりの眠りについた。

「ん……っ、ふああ……。あれ？」

さつきが唇。今は夕方。

ざっと五、六時間は眠っていただろう。

ただ違うのは、銀時の腕ではなく、すぐ横に毛布を掛けて寝ていた。

「梨花……？」

ぼつりと名前を呼ばれた。

見ると、かちりと目が合った。

「銀時、気分はどうなのですか？」

「だいぶ、ただ頭痛くて……」

そう言いながらも起き上がる銀時に、手を添えながらも言う。

「ボクを、寝かせてくれたのは銀時ですか？」

「……ああ、悪かったな……」

「き、気にしてないのですよ。銀時がよければ、それで……」

尻すばみ。俯く梨花を覗き込む。

「できれば、代わりではなく、ボクをボクとして頼ってほしいのです。先生でも誰でもなく、ボクとして……」

これを言つたのさえ恥ずかしい。ほてる類。

「……ごめんなさい……。俺……」

「銀時が暗いと、ボクも真つ暗なのです。ここは、にこやかスマイルみぱー」

梨花の笑顔に答えるように、銀時も満面の笑みを返した。

しばらく、二人は互の顔を眺めながら笑い合っていたらしい。

「あれ、また出番無し？」

「だから言つたる、削られやすい人材だつて……」
次回は出す。多分。

光消し編 其の7 く何処にも人の代わりなんていないく (後書き)

(梨) まあたくだらないの書きましたね作者？

(銀) 本当だな。恋愛描写？は？ふざけんなよ作者？

(作) ふ、ふんだ。私はアンタらに認めてもらえなくても、読者様に認めてもらえば・・・。

(梨) こんな認めてくれる読者様はいませんですよ。

(銀) おまけに二話連続で羽入と高杉の出番ねーし。仕事しろよ作者。

(作) はい、では次回予告に移ります！

(二人) あ、逃げた。

(作) 次回予告！

ほのぼのはもう終了！

銀時の頭痛の謎が分かります。

そしてまた銀時が姿を消した！？

ご期待ください！

(梨) では、感想、評価よろしくおねがいます！

(作) 先越されたー！

光消し編 其の8 〽ワンパターンな展開も日常茶飯事〽 (前書き)

光消し編最終回！

いえーい。・・・あれ、テンション低い。

つい最近、風邪の恐ろしさをこの身をもって知った私です。大掃除で風邪ひきました。

次回から過去捏造です。

では、本文をどうぞ！

光消し編 其の8 〱ワンパターンな展開も日常茶飯事〱

ピツ、という電子音がし、新八が体温計を見ると、37.2の文字。神楽と梨花も、横からそれを覗き、にっこりと笑う。

「銀時は風邪をひくと長引くしギャップに戸惑う事もありますが、治癒力も半端ないのです」

「倒れて二日後に目が覚めて、その後五日間寝込んでて何が治癒力アル。ただの気まぐれじゃないかヨ」

「まあそう言わず。何か飲み物持ってきてきます？」

「じゃ、イチゴ牛乳」

「銀時らしすぎて逆に笑っちゃうのです。みぱー」

先日のシリアスほのぼのから一変、ようやく高熱から微熱にまで下がった銀時。

笑顔を見せているが、心なしか顔色が悪いような気がする。

「銀時？顔色が悪くないのですか？」

「へ？んな事・・・った・・・」

「みつ、みい？！だから言ったのです！」

どうやら頭痛のせいらしい。

熱がひいても治らないものなのか・・・と一人考えに耽っている梨花。

「頭痛いアルカ、銀ちゃん」

「頭痛が何だコノヤロー。こんな気合いで乗り越えるのが銀さんだぜ？」

「銀時は体育会系ですねえ」

唐突な声に振り返ると、羽入が梨花の頭に頬杖をついて不敵に笑っている。

沈黙の後、梨花が頭から阿保巫女を叩き落とし、銀時達もまた正面を向き、完全無視を決め込む事に決めた。

「ち、ちよつと！ボク最近出番ないのでから少しくらいは・・・」

「そう、じゃあ、姿だけの登場で。もう喋んな」

「姿だけって、文だけだから分かんなくね？」

「銀さん、それ言ったらおしまいです」

「残念ネ、削られやすい人材」

「あうあうあう・・・」

悪かった羽入。次回かその次にはお前がでまく（ry）

困ったように笑う銀時の見て、梨花の頭では、この前高杉から聞いた話が反芻していた。

「先生が殺された理由は、幕府に銀時を差し出さなかったからだ」

唐突にこんな事を言い出した高杉に、一同は口を開けて呆然とするしかなかった。

しばらくして、新八が問う。

「差し出さなかつた？」

「銀色の髪に、赤い瞳。その容姿から天人と疑われた。幕府の狗どもは、本気で銀時が天人だと思つてた」

「そんな事・・・」

「先生がそんな事許す筈がねエ。頑なに拒んだ先生を、銀時の目の前で殺したんだ」

皆、ただ声も無く、外を眺め続ける高杉の横顔を見つめていた。

それほどまで痛烈な過去を聞いても、

症候群で豹変した銀時の修羅を見ても、

梨花達にはそんな事、想像すらできなかつた。

頭を押さえてうなだれている銀時の声で羽入は我に帰つた。

高杉に呼ばれた新八、神楽、梨花の代わりに、銀時の事を任されたのだ。

「う・・・う、っ・・・」

「頭、まだ痛いのですか？」

「っ・・・ああ、平気だ・・・」

だが、やっぱり顔色が悪い。熱があるわけでもなさそうなのだが・・・。

無理させてはいけない、と頭に響かぬよう、ゆっくりと布団に寝かせた。

時折、顔が歪み、食いしばった歯の間から苦悶の声が漏れる。

弱々しいその姿を、羽入は悲しそうな瞳で見つめた。

倒れてきてから、ずっと頭痛だけは治っていない。理由は分からない。ただ、何かしら意味があると羽入はふんでいた。

痛々しく巻かれた、首の包帯に目をやった。

ここだけはいまだに治らない。本当に、何が原因なのやら……。

難見沢症候群は何処で発症したのだろう。羽入の思考回路は止まる事が無く、次々と疑問が流れ込む。

「羽入、」

「は、はいっ？」

「悪い、水、くれねえか？」

「あつ、はいはい、水なのですな」

慌ただしく部屋を飛び出していく。巫女服が相変わらず危なっかしい。

それを見送ってから、銀時は深く息をついた。

頭がずきずきと痛む。あまりの痛みに、意識が朦朧としてきた。

ちり、とノイズのように、何かフラッシュバックした。

よく分からない。ただ、血の海が広がっていて……。

「な、に……？」

真選組の隊服が見えた。倒れているのは幾らもの人。

「や、だ……見たくない……」

そしてその中央で狂ったように笑っていた、自分自身。

次に映ったのは、力なく倒れる、かけがえのない家族の姿。

それを手にかけてのも、紛れも無い、自分だった。

「あ……ああ……、う……っ！」

視界の端に、羽入が慌てて近づいてくるのが見えた。

だがだんだんとぼやけ、やがて闇に吞まれていく。

「ごめんなさい、」

と一つ呟いて銀時は意識を飛ばした。

「あの巫女娘には話したが、あの頭痛の原因は記憶だろう」

「ボクも実はそうだと思ってたのですよ」

「なら何で言わなかったの？」

「確信もないのに提案するなんて、ボクのプライドが許しませんです」

「……梨花、それは問題アルヨ」

珍しくまともな事を言う神楽。

「しかし記憶って、何のですか？」

ふう、と紫煙を燻らせ、高杉は口を開いた。

「幕府の狗を半壊滅させた事と、オメーらを傷つけた事しかねエだ
る」

「「「！」「」」

三人それぞれ、銀時につけられた傷跡に触れる。

何とも言えない感情に陥った三人。

だが、

「めつずらしい。杉ちゃん隊長がちゃんと言明なんて」

暢気な声。シリアスな雰囲気を一瞬にしてぶち壊したのは、鬼兵隊
No.2、黒葉美代である。

おいこの年齢不詳。空気壊すのもいい加減にしろ。と満場一致の意
見。

「本当、何が原因なのかしらねー……。ホラ、白夜又って情緒不
安定だから、何か目的があってやったとすれば簡単なんだけど。病
気だから自然感染とか？」

「美代、今その話してませんのです」

だがやっぱりそんな事おかまいなしの美代である。

何気に呼び方が白夜叉に戻っている。安定させる。

「でも、戦争の頃に、銀さんだけかかっているって事は、やっぱりな
「梨花ああああ！！！！！！」

新八の言葉を見事に遮って、部屋に飛び込んで来たのは羽入。

必死の形相で飛び込んで、あげくの果てに盛大にぶつ倒れた阿保巫
女を冷ややかに見下ろす。

「ああーら不様ね羽入。その袴膝上まで切ってあげましようか？」

「そ、そんな不謹慎な袴いらなのです！銀時がつ、記憶を思い出
しちゃったのです！」

「ねえ、記憶つて何？」

「え、じゃあ今相当やばいアルカ？」

「やばいですマジやばいですガチなのです。あうあうあうあう……
」

例によつてのガン無視（美代）だ。

「今はどうしてんだア？あいつはよ」

「あ……今はまた眠っちゃいました。……とつても苦しんでま
したのです。どうして忘れたりしたのですかね？」

「おおかた、白ちゃんがよく分からない事したんでしょ。いつもそ
うだし」

「一遍死んでこい馬鹿女」

戯言をほざく美代に一喝。

だがしかし、梨花には気になる点が一つ。

「ほったらかしにしといて平気なのですか？羽入」

・・・・・・・・！！

さらに畳み掛けるように新八も言う。

「あれ、羽入ちゃんに看病頼みましたよね？」

・・・・・・・・！！

極めつきは神楽のこの言葉。

「それ、私達が戻ってから言った方がよかったアルヨ。銀ちゃんに何かあったらどうするアル」

・・・・・・・・！！！！

打ちのめされた羽入である。

「・・・・・・・・じゃ、一人も淋しいだろうし行くところか」

たまには空気を読む美代だった。

「・・・・・・・・どういふこと、これ・・・」

視線の先にはもぬけの殻の布団、一応たたんである寝具代わりの着

物、そして消えたいいつもの普段着と真剣。

「・・・また消えたよ白夜叉」

「銀さん・・・」

「銀ちゃん・・・」

「・・・羽入、どう責任とるのよ」

「かねてから思ってた事なのですが・・・梨花は前、過去に戻ればいいと言っていましたよね？」

「つまり？」

「いや、過去から原因を探せばいいかと・・・」

長い沈黙。 ややあつて、全員が口を開いた。

「「「「・・・先に言わんかい阿保巫女!!」」」」

「あ、あうあうあうっ・・・」

夢幻のあなたに手が届きそうぞうで

勝手な約束で全てを奪った

夢幻のあなたに触れたくて

禁忌の罪を犯した

夢幻のあなたが振り向いた

その笑顔は、シンジツですか？

光消し編 } E n d }

N e x t 心映し編

光消し編 其の8 〱ワンパターンな展開も日常茶飯事〱（後書き）

おまけ 神威と羽入ちゃん

（神）はるー、お侍さんいるー？

（羽）・・・誰なのですかあんだ。

（神）お、可愛いお嬢ちゃんだねえ。俺は神威、神楽の兄だよ。

（羽）その神威が何の用なのですか？

（神）お侍さんと殺し合いたくてさあ。いないの？

（羽）銀時の事ですか？今はいませんですよ。

（神）ふうん・・・。じゃあ仕方ない、お嬢ちゃんと殺るから

（羽）・・・ちよつと黙ってたなら、言いたい放題ですね。

夜兔だかヤムチャだか知りませんが、あなたみたいな一介の人間が鬼の私に勝てるっても？

（神）へ、何？あれ、何か目赤くない？白いところよりも真ん中が。

え、何その刀、俺の攻撃無意味？

（羽）無意味なのです あうあう

すみませんでした。この後、神威は脱兎の如く逃げました。

次回予告

心映し編突入！

羽入ちゃんがいきなり村塾行きます。

では、感想、評価よろしくおねがいします！

心映し編 其の1 く過去編は時系列的に難しいく (前書き)

久しぶりです！最近ネタが・・・ (泣)

再臨編も頑張ってますので、そちらも是非・・・。

では、本編をどうぞ！

心映し編 其の1 く過去編は時系列的に難しいく

心映し編

アルバムに飾られた、色とりどりの写真

全てを知る為に私は一枚を取った

古いビデオのような、鮮やかな時計の秒針

全てが知りたくて私は針を戻した

何もかも真実は時の中

全てを知った私は、いったいどうするのだろうか？

閉じていた瞳を、ゆっくりと開いた。

前に見た、田舎だが未来よりは生き生きとした村があった。

さて過去。全ての長編において失態をおかしている羽入が、銀時の記憶の旅に來た訳だ。

今は秋なのだろう、紅葉がさわさわと揺れている。

『九月なのに紅葉なのですか。実体化すると寒そうなのです・・・』
どうしようかため息をついた所で何にもならない。九月に紅葉も

おかしくない。(多分)

自分の記憶をたどり、村塾を目指す。

『しかし、昔は緑も綺麗だし、住人もいたのですね、この村。ああして人気が無いのも、攘夷戦争の影響なのでしょうか・・・』

桃色に色づくコスモスの群集を眺め、ぼつりと呟いた。

しばらく歩いていると、目的地の村塾らしき所(未来では焼けていたので、確信が無かった)に着いた。

半透明なので、扉をすり抜けて入る。見たかんじ、誰もいない。

どうせ実体化していないし、勝手にあがる事にした。

『もう殺られた?』

って羽入、そんな訳ないだろっての。

『むむむ・・・誰もいないなんておかしいのです!誰か来いばー! ーかつ!』

口が悪くなってきた馬鹿巫女もといオヤシロ様。

それもそうだろう。授業ならともかく、もう夕方だ。少なくとも沢山はいない。

とりあえず怒りを静め、辺りを詮索する。

一つ一つ部屋を見るが、誰もいない。

やがて広い、教室だろうという部屋に入る。

『特に何もありませんねえ……。あうあうあう……。』

ものついでに、縁側に出てみる。

のどかな日の光が差し込んでいる。

『……。ふああああ……。あいやいやっ！うう……。眠い……。』

半透明だというのにぼかぼかとぬくまっている。悠長な奴だ。

『ふ、ふあ……。くう、くう……。』

そのまま縁側に座りこみ、こてんと眠りについた。

しかし、無防備な寝顔もまた可愛

『むにゃ……。あ……。何かもうめんどくさいのです……。』

……。羽入、それは本音が知らんが、意味しだいでぶっ殺すから覚悟しろ。

まあそんなこんなで。

次に目が覚めたのは、もう星の浮かぶ夜だった。

それにしてもまあ、よく秋で日の短い夕方の夕焼け（あつたかいんだが）で夜まで寝れたよなあ……。

『あうあうあう……くっ、にゅううう……。ふあ、よく寝ましたなのです』

睡眠もとり、疲れも眠気も吹っ飛んで、実体化して宙返りできそうな（できません）気分だ。

よっころしよ、と立ち上がるうとした時、

「……おきた??」

すぐ隣で聞こえた声に、ビクツと体を震わせ、がくがくとさながらロボットのような仕草で振り向く。

銀髪に天然パーマ。赤目という特徴。

……銀時？

『あ、はい……なのです。……あ、あうあう……』
「なに？」

こくん、とかわいらしい動作で首を傾げる銀時に、羽入も笑顔になつて言う。

『ボク、羽入と申しますのです。幽霊じゃないのですよ、神様なのです』

「……よかった。ゆうれいってからだがすきとおってるから、お前もゆうれいかとおもった」

『違いますのです！ボクは神様なのです！オヤシロ様なのです！』
そんなに正体を明かして大丈夫なんだろうか？

「ふうん、おれ、銀時。あまいものがすき」

『・・・昔から変わらないんですね・・・』

「なに？はにゅー？」

『何でもないのですっ！』

銀時は空を見上げていた。赤い瞳に白い星が輝いている。

不意に視線を下げ、羽入にこう言った。

「ねえ、紅葉、すき？」

『はい？』

「おれはきらい。アカはおれのめのいろ。おにっぺいわれるいろ。
チのいろ。だから、きらい」

胸に突き刺さった思いがあった。

口走って言葉が出た。『紅葉はっ』

「??？」

『美しく、艶やかに、しかしまた、儚く色づく。秋に赤く染まっても、すぐに散って、寒い寒い冬に入る。けれども、それは短い間だけど、人に見てもらいたいから色づいて、そして散っていく。皆、生きている事を教えたいと、ボクは思うのです』

「??????」

『・・・そして、貴方の大事な人も、おそらくはそうなのですよ
あうあう』

「よくわからないけど、おれのだいじなひととせんせいだから。また、おれがおおきくなったらはなしてね？」

『はいっ。おやすいごようなのです』

言いながら思い出した。

銀時が言った言葉の意味。昔羽入に会ったという事実。

こんなヒント出てるんだったら、もっと早く過去に行けばよかった・・・。

しかし、最後の台詞の答えが無い。という事は・・・、

攘夷戦争時代にも行くんだな・・・。もちろん行く気だが。

しかし、桂の言っていた事もあるのに、何故最初から攘夷戦争に行かなかったのか。

一度でいいから吉田松陽を見てみたかったという好奇心だ。おいおい・・・。

「はにゅー？どうしたの??」

『あうっ、気にしないのです。あうあうあう』

笑ってごまかすが、銀時ははてなを浮かべて首を傾げている。

あ・・・やばい可愛い。

銀時、先生って、どんな人なのですか？」

「せんせい？優しくて、あつたかくて、それで、えっと・・・」

『むにゅ〜・・・銀時の父親なのですかね?』

「ちちうえだよ。おれのだいじなとうさん」

『父上ですか・・・。ふふっ、まさか銀時からそんな言葉を聞けるとは・・・。』

「?????????」

さつきからブツブツ独り言を呟く羽入に、ひたすら疑問を浮かべている銀時。

そんな銀時の赤い瞳が、すっと別の方を向いた。

「せんせいっ!」

銀時の言葉に、首がもげそうな勢いで振り返った羽入。

長い前髪の間から見える目はとても穏やかで、満面の温かい笑みを浮かべ、銀時の目線の高さになるようしゃがみ込む。

「何やってるんですか?銀時。こんな所にいると風邪をひきますよ」

「あのね、紅葉見ようと思って来たら、はにゅーっていうゆづれいに会ったんだよ。だから、ずっと話して・・・あれ?はにゅー?」

その頃羽入は、近くの木の陰に隠れていた。

『あうあう、あれが吉田松陽なのですか・・・とっても優しそうな人なのです』

しばらく、父と子の会話を眺めていた羽入だった。

ところで・・・、

『ボク、幽霊じゃないのです・・・』

哀れ！

心映し編 其の2 く大人っぽい人程子供だったりする (前書き)

スランプ&テスト&漢検から帰ってきた作者です！

成績が(特に理科)がヤバイ・・・四月からまたPCができないかも・・・高校受験め！つーか高校行けないかも・・・。

では、本文をどうぞ！

心映し編 其の2 く大人っぽい人程子供だったりする

『あうあうあう……。どーしましようねえ……。吉田松陽を、
近で見てもみましょうか』

なんの思いつきか、夜中こっそりと松陽の部屋に忍び込もうという
計画を考えついた羽入。

なので夜中。

『しかし、静かな夜ですね……。雛見沢を思い出します』

よくよく考えたら、ここに来てほしい一ヶ月か。

その間、ちよつと大変な事があった……。うん、ちよつと、かな・
。。

思えば思つ程、ブルーになっていく。早く全部終わらせる為にも、
銀時の過去を知らなくては。

抜き足差し足で廊下を歩く。実体化していないので、足音はもちろ
んしない。

昼間確認した、松陽の部屋を覗き込む。僅かに開いた襖から、長髪
の男の後ろ姿が見えた。

『にゅ……。せーのっ』

小声で掛け声。ぴよんっ、と飛び込んだ。

蠟燭の火と、月明かりをたよりに書き物をしている松陽。ふと、何かを見つけたかのように顔をあげる。

「今日は、とても綺麗な月ですね。こんな夜は、誰かと共に過ごしたいものです」

『・・・？』

「そうは思いませんか？小さな巫女さん」

まっすぐこちらを見つめる、優しい視線。

誰の事かと思つたが、小さな巫女なんて自分以外にいない。

『はう・・・、あうあう。ボクの事が見えるのですか？』

「はい。銀時と仲の良さそうに話していましたね。かわいらしい巫女さんです」

『ボクは・・・羽入と申しますのです。あなたは・・・』

「吉田松陽といます。羽入さん」

彼が、銀時の恩師……。しばらく見とれていた羽入は、子供のように笑う松陽の声で我に帰った。

『むうう〜！松陽は子供みたいなのです！・・・でも、銀時があそこまで想う理由も、分かる気がしますです』

「え？」

『い、いえ！何でもっ。あの、松陽は、銀時の事どう思ってるのですか？』

「と、唐突に驚かせますね……。そうですね・・・」

斜め上を向き、三秒程考え込んだ松陽。やがて柔らかな笑顔を浮か

べ言った。

「私の息子です」

『簡潔ですねえ……』

「物足りませんか？」

ふふっ、と笑みを零す松陽に、ペースを乱される。な、何なんだこいつ……。

「あの子は、捨て子なんです。物心つかぬうちに捨てられ、あの銀色の髪と赤い目のせいで忌み嫌われ、憎しみと絶望しか知らない子でした。でも、此処に来て、あの子はだいぶ変わりました。仲の良い友達もできたようですし」

少し考えて、仲の良い友達が桂と高杉である事を理解した。

「何より、明るくなりましたからね。可愛さは相変わらずですが」

『……親バカですか松陽は』

「おや、可愛くないですか。兎みたいですし」

『ああ……でも分かる気が……。いやいや！何故ボクはこの親バカに同意してるんだボクは！』

過去に来て良かったのか分からなくなった羽入だったが、中々面白い奴（親バカの奴？）もいる事が分かった。

……あーあ、疲れた。

心映し編 其の2 大人っぽい人程子供だったりする (後書き)

(作) お久しぶりです！作者です！

(銀) 最近お前の好きなアニメ変わったよな。裏切り者がいるぜ此処に！

(作) 違う！あれは最近BSでやってるって気付いたただけであって、某ホラーゲームのパロディとかしか見てないもん！

(梨) 四月からの銀魂第二期見るのですか？

(作) 当たり前！んでは次回予告！

・・・あ、次回考えてないわ。お楽しみです！すみません・・・。
では、次回も読んでくださいね！

ところで、ラストの台詞これで合ってる？

(銀・梨) 知らねーよ。

心映し編 其の3 く遅寝遅起きは不健康の元々 (前書き)

夏休みも明日で終わりの作者です。

30分クオリティを投下します。

休止宣言したばかりですが、更新しますでは！本文をどうぞ！

心映し編 其の3 遅寝遅起きは不健康の元

「羽入さん、起きてください」

『にゆう・・・何ですかもう梨花・・・あと五分・・・』

「私は松陽ですよ羽入さんっ！もうお昼ですし起きてください」

半透明なので触れる事もできない。なので声を張り上げ、この巫女を起こそうと努力する松陽。

彼の部屋で、羽入が松陽と会ったその晩、タイムスリップなどをして疲れたのか、すぐ眠ってしまった羽入。

だが、授業が終わったなら起きてるだろうと甘い考えを抱いた松陽が間違っていた。

既に日は高く昇り、調度昼飯時だというのにこのアホ巫女は今時のマンガで見るような寝言を呟きながら眠りほうけていたのだった。

「羽入さん！お昼ご飯抜きにしますよ羽入さん！！」

『にゅあああああ昼飯抜きはつらいのです！！・・・あれ松陽、何ですかその出来の悪い子供を見るような目は』

「・・・いえ、巫女さんでもご飯は食べるんですか？」

『はい、根性で実体化すれば可能なのです』

タイムスリップしたので、梨花とのリンクが途切れてしまっているのだ。

神様も腹は減るのだ。だからリンクが途切れた今、実体化して物を食うしかあるまい。

『せーのっ』

と、何とか実体化し、松陽の前に正座する。

とたんに松陽の大きな手が髪に触れ、羽入は思わず身を引いた。

「ああいえ、別に変な意味でした訳では……。ただ、なかなか変わった髪の色だと思ひまして」

「そうなのですか？個人的には、これくらいざらにいますと思ひますのですが」

そりゃあ、緑とか金髪とかざらにいたから、馴染んでいるんだろうな。うん。

「さて、準備をしませんと。実はですね、今日は銀時の他に二人、子供達を招待しているんですよ」

「ん、二人？もしやそれh」「松陽先生ーっ！！！！！！」

羽入の言葉を遮り入ってきたのは二人の少年。

一人は勝ち気そうな短髪の子。もう一人は長い黒髪を纏めた子。

『あつやっぱりなのです』

「紹介します。晋助と小太郎です。ほら、二人も挨拶しなさい」

「・・・誰アンタ。巫女？何で巫女がここに？」

「え、ああはいなのです。ボクは羽入なのです、よろしくなのですよ」

「ふーん、羽入か。俺は高杉晋助。こっちはツラ」

あ、と羽入が声をあげた瞬間に、小太郎が晋助に反撃する。

「ツラじゃない桂だ！羽入殿、正しくは桂小太郎だ。ところで巫女とは、何処の神社の巫女なんだ？」

ああ・・・と思案顔になる羽入。

どうせパラレルワールドだし、分かりはしないだろうと、口を開く。

「古手神社なのです。ここからずうーっと東にある神社なのですよ」

「つーか何でそんな遠い神社からわざわざここに来たんだよ？」

ぐっ、と言葉に詰まる。

目の前には四つの目がこちらを向いている。

と、ここで助け舟をだしてくれたのは松陽だった。

「私の知り合いが神主をしていますがね、その娘さんなんです」

この一言で、羽入に対しての警戒を解いた二人。

『さすが銀時の師匠なのです。この二人からも信頼されていますし。・・・ん？あれ、そういえば』

「銀時はいないのですか？」

「あ」「あ」

「おや二人とも、どうしましたか？」

「俺達、先生呼んで来るって言って、銀時を置いてきてしまいましたし

た・・・」

「おやおや。では、私は準備をしますので、あなた達は銀時と待っていてくださいね」

そう言っつて松陽は部屋から出て行った。

次回へ

心映し編 其の3 遅寝遅起きは不健康の元 (後書き)

(作) この作品、三月以来投稿してないことに気付いたんですよ

(銀) まあ今更って感じだけだな

(梨) 久々に書いて腕が落ちましたのですか？

(作) 今は文章よりネタが危ない

(梨) 何言ってるんだか。またもや今更って感じなのです。

(作) はい (ごまかした) 次回予告は・・・皆で昼飯にしましょう
!では、

(三人) 感想、評価、よろしくおねがいします!!

(作) リクエストも受け付けてます! 詳しくは活動報告にて!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8102n/>

血濡れ夜叉の泣く頃に

2011年10月7日17時58分発行